松江市文化財調査報告書　第 189 集

アークタウン黒田造成工事に伴う発掘調査報告書

白 岸 古 墳 群

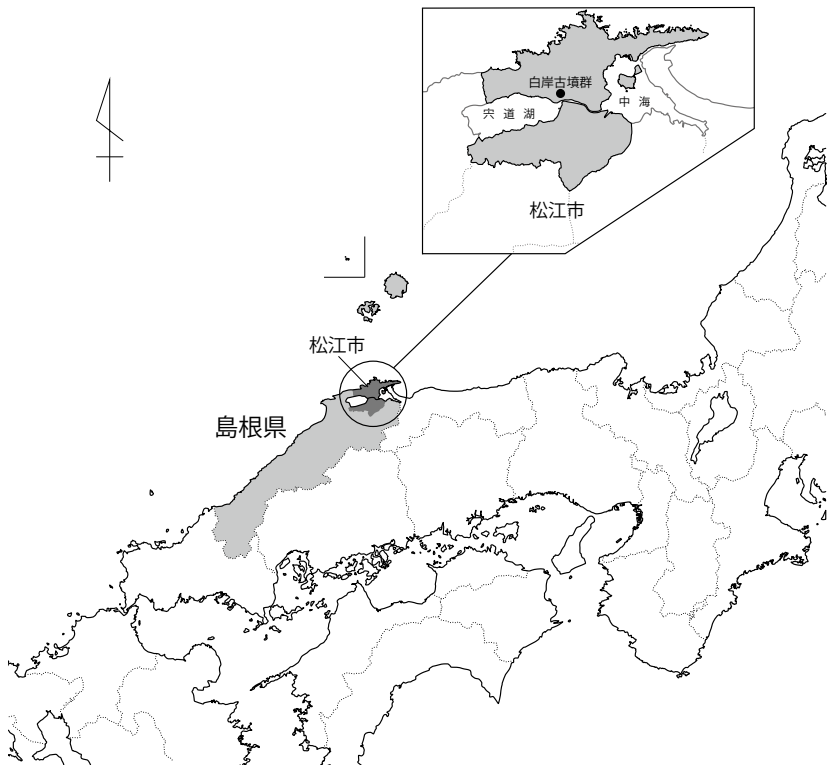
平成 30(2018) 年 9 月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江市文化財調査報告書　第 189 集

アークタウン黒田造成工事に伴う発掘調査報告書

白岸古墳群（しろぎし）



平成 30(2018) 年 9 月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　言

1. 本書は、平成 30 年度に実施したアークタウン黒田造成工事に伴う白岸古墳群の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、株式会社ラインズアークから松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。
   （名　称）白岸古墳群（しろぎしこふんぐん）
   （調査地）島根県松江市黒田町字白岸 599 外（しまねけんまつえしくろだちょうあざしろぎし）
4. 現地調査の期間
   平成 30 年 4 月 12 日～平成 30 年 6 月 20 日
5. 開発面積および調査面積
   開発面積　5,621.40㎡
   調査面積　200㎡
6. 調査組織

依 頼 者	株式会社ラインズアーク	代表取締役　山田　登
主 体 者	松江市教育委員会	教　育　長　清水　伸夫

【平成 30 年度】 現地調査および報告書作成業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部　　長　藤原　亮彦
	〃	次　　長　永田　明夫
	〃　まちづくり文化財課	課　　長　飯塚　康行
	〃　　〃　埋蔵文化財調査室	室　　長　宮本　英樹
	〃　　〃　　〃　調査係	係　　長　川上　昭一
	〃　　〃　　〃　　〃	主　　任　徳永　隆
	〃　　〃　　〃　　〃	学 芸 員　三宅　和子
	〃　　〃　　〃　　〃	嘱　　託　門脇　誠也
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長　清水　伸夫（～5 月 27 日）
	〃	星野　芳伸（5 月 28 日～）
	埋蔵文化財課	課　　長　赤澤　秀則
	〃　調査係	調 査 員　小山　泰生（担当者）
	〃　　〃	調査補助員　宇津　直樹

7. 調査に携わった発掘作業員
   井川　洋、加藤恵治、金坂　昇、中村愼市、深津靖博、峰谷一雄

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

　宇津直樹、角　優佳

9. 発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の方から多大なご指導・ご教授・ご協力を頂いた。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）

　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　企画員　仁木　聡

　島根県立古代出雲歴史博物館　　学芸員　澤田　正明

10. 本書の執筆は、第 1 章を松江市埋蔵文化財調査室が、第 2 ～ 4 章を小山が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て小山が行った。

11. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

［須恵器］

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第 11 集』島根考古学会

大谷晃二 2003 「宮山古墳をめぐる諸問題」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター

※本書に掲載した遺物の時期は、大谷氏の編年から出雲○期と記載する。

12. 註と参考文献は各章末に掲載した。

13. 本書で用いた方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベルは海抜標高を示す。

14. 本書における遺構名の表記は、以下のように略号を冠した。

　SK：土坑　　P：ピット・柱穴

15. 本書に掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを配した。遺物実測図の縮率は原則、須恵器と陶磁器は 1/3、瓦は 1/4、金属製品は 1/2 とした。断面の表現は須恵器の断面は黒塗り、陶磁器の断面は白ヌキ、瓦と金属製品の断面は網掛けで示した。

16. 本書に掲載した金属製品の X 線写真の撮影は、島根県立古代出雲歴史博物館のご協力を頂いた。

17. 報告書作成は、遺構図・遺物図は IllustratorCC2018（Adobe 社）を用いて浄書し、図版レイアウトおよび原稿執筆などの編集作業は InDesignCC2018（Adobe 社）を用いて行った。

18. 測量データ・出土遺物・実測図・写真等の資料は、松江市教育委員会で保管している。

目　次

例言

第１章　調査に至る経緯…… 1

第２章　位置と環境…… 2

第１節　地理的環境…… 2
第２節　歴史的環境…… 2

第３章　調査の成果…… 5

第１節　試掘調査と本調査の概要…… 5
第２節　１号墳…… 12
第３節　２号墳…… 16
第４節　３号墳…… 20
第５節　その他の遺構と遺物…… 24

第４章　総括…… 27

第１節　白岸古墳群の様相…… 27
第２節　結語…… 29

遺物観察表

写 真 図 版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図　調査地位置図…… 1
第 2 図　周辺の遺跡分布図…… 3
第 3 図　開発範囲と調査範囲位置図…… 5
第 4 図　T2 トレンチ平面図・断面図 …… 6
第 5 図　T3 トレンチ平面図・断面図 …… 6
第 6 図　調査前地形測量図…… 8
第 7 図　1 ～ 3 号墳配置図…… 9
第 8 図　1 ～ 3 号墳東西・南北土層図…… 10・11
第 9 図　1 号墳墳丘測量図・土層図…… 12
第 10 図　1 号墳周辺遺物出土状況平面図…… 13
第 11 図　1 号墳周辺出土遺物…… 14
第 12 図　SK01 平面図・断面図 …… 15
第 13 図　SK01 出土遺物 …… 15
第 14 図　P01 ～ 05 平面図・断面図 …… 16
第 15 図　2 号墳墳丘測量図・土層図…… 17
第 16 図　2 号墳第 1 主体部実測図…… 18
第 17 図　2 号墳第 2・3 主体部実測図 …… 19
第 18 図　2 号墳周辺遺物出土状況平面図…… 19
第 19 図　2 号墳周辺出土遺物…… 20
第 20 図　3 号墳墳丘測量図・土層図…… 21
第 21 図　3 号墳第 1 主体部実測図…… 22
第 22 図　第 1 主体部出土遺物 …… 22
第 23 図　3 号墳第 2 主体部実測図…… 23
第 24 図　3 号墳周辺遺物出土状況平面図…… 23
第 25 図　3 号墳周辺出土遺物…… 24
第 26 図　SK02 平面図・断面図 …… 24
第 27 図　SK03 平面図・断面図 …… 25
第 28 図　遺構外出土遺物…… 25
第 29 図　T4 トレンチ断面図 …… 26
第 30 図　白岸古墳群配置図…… 28

挿表目次

表 1　試掘調査トレンチ一覧…… 5
表 2　白岸古墳群遺構一覧…… 28

写真図版目次

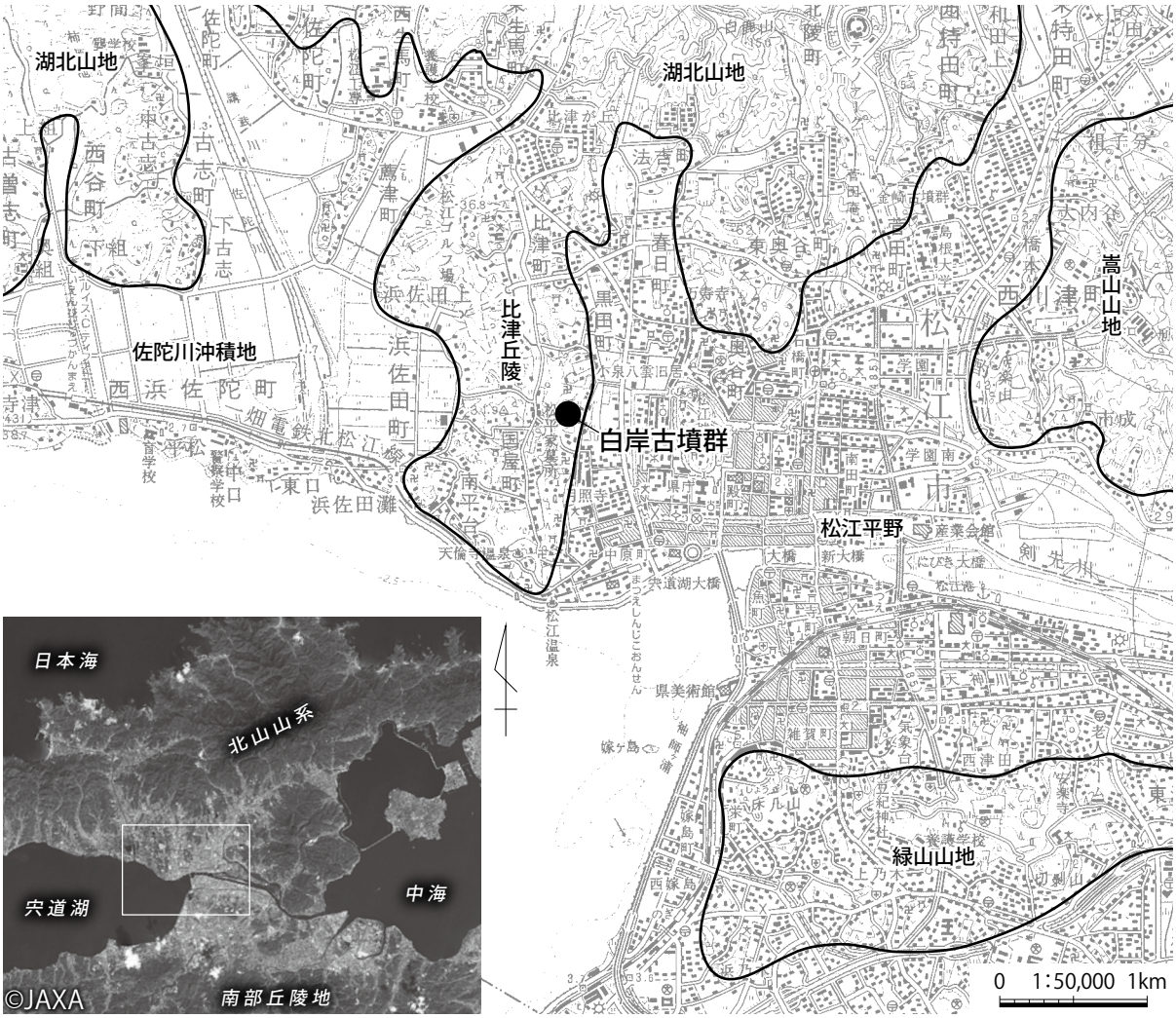
図版 1　1　白岸古墳群調査地遠景 (南から)、2　調査前全景 (北東から)
図版 2　1　白岸古墳群全景 (東から)、2　白岸古墳群全景 (北東から)、
　　3　白岸古墳群全景 (南西から)
図版 3　1　1 号墳全景 (東から)、2　1 ～ 2 号墳間の区画溝 (南東から)、
　　3　1 号墳西側削平部分の近世遺構群 (南から)、4　SK01 完掘状況 (南から)
図版 4　1　2 号墳全景 (東から)、2　2 ～ 3 号墳間の区画溝 (南東から)、
　　3　1 ～ 2 号墳掘り下げ状況 (北から)、4　2 号墳第 1 主体部ベルト設定状況 (西から)
図版 5　1　2 号墳第 1 主体部完掘状況 (南から)、2　2 号墳墳裾主体部完掘状況 (北から)
図版 6　1　3 号墳全景 (東から)、2　3 号墳第 1・2 主体部完掘状況 (南から)
図版 7　1　3 号墳第 1 主体部土層堆積状況 (北から)、2　3 号墳第 1 主体部完掘状況 (北から)
図版 8　1　3 号墳第 2 主体部ベルト設定状況 (西から)、2　3 号墳第 2 主体部完掘状況 (南から)
図版 9　1　SK02 埋土断面 (南東から)、2　SK02 完掘状況 (南から)、3　SK03 埋土断面 (北西から)、
　　4　SK03 完掘状況 (北から)、5　SK04 検出状況 (北から)、6　SK04 完掘状況 (北から)、
　　7　1 ～ 2 号墳間の区画溝　遺物出土状況、8　3 号墳第 1 主体部　遺物出土状況
図版 10　出土遺物

第 1 章　調査に至る経緯

平成 29 年 11 月、松江市教育委員会に同市黒田町地内における約 5,600㎡の宅地造成計画に伴う埋蔵文化財の有無確認にかかる調査依頼書が、株式会社ラインズアークから提出された。これを受け、現地の分布調査を実施した結果、畑や宅地等により丘陵が削平され事業予定地の大半が元地形を留めていなかったものの、丘陵頂部等については地形から古墳が存在する可能性が想定されたことから、同年 12 月に試掘調査を実施することとなった。結果、現況から予想されたとおり古墳の区画溝が検出され、古墳 3 基の存在が明らかとなった。

このことから、平成 30 年 3 月に遺跡発見の通知を松江市教育委員会から提出し、丘陵頂部の範囲について「白岸（しろぎし）古墳群」として周知したうえで遺跡の保存について事業者と協議したが、立地的に当該古墳を現地保存したままでの開発は困難とのことから、同月に遺跡の発掘届が提出され、この内容について県教育委員会に協議したところ、古墳群全体が削平される計画であったことから遺跡全域の発掘調査の指示を受けることとなった。

以上の経緯から、当古墳群について平成 30 年 4 月から発掘調査を実施するに至ったものである。



第 1 図　調査地位置図 (S=1：50,000)

第２章　位置と環境

第1節　地理的環境（第1図）

白岸古墳群（1）は、島根県松江市黒田町字白岸 599 外に所在する。『出雲国風土記』（以下、風土記）によれば、出雲国島根郡法吉郷に含まれる場所にあたる。

島根半島には平均標高 350 mの山塊が東西に連なる北山山系が走り、松江市域では北山山系から南に向けて多くの支脈丘陵が延びている。この丘陵のうち、風土記に記載された「佐太水海（さだのみづうみ）」に比定されている浜佐田町の東に接する支脈、つまり比津丘陵から南へ延びる支脈丘陵の東半分とその東麓の低地一帯に黒田町は位置している。

白岸古墳群は黒田町の南西端にあたる標高 16 mの単独丘陵上に位置し、この丘陵の南には白岸池が所在する。東には比津川の流れる南北に長い谷があり、その一部は風土記に記載された「法吉陂（ほほきのつつみ）」に比定される。このあたりの谷では丘陵からの伏流水も豊富であるため、水田耕作のほか湿地を好む黒田芹（くろだせり）の栽培が行われてきた。現在の黒田町周辺では宅地化が著しいが、周囲に比べて土地が低いため、大雨の後はしばしば滞水する事例が報告されている。

第2節　歴史的環境（第2図）

白岸古墳群周辺における遺跡の数は多くないが、当該遺跡から北側の丘陵を中心に大規模な宅地開発や道路の新設等が行われたため、近年では発掘調査による遺跡の発見が増えてきた。以下では、周辺の遺跡について時代を追って概観する。

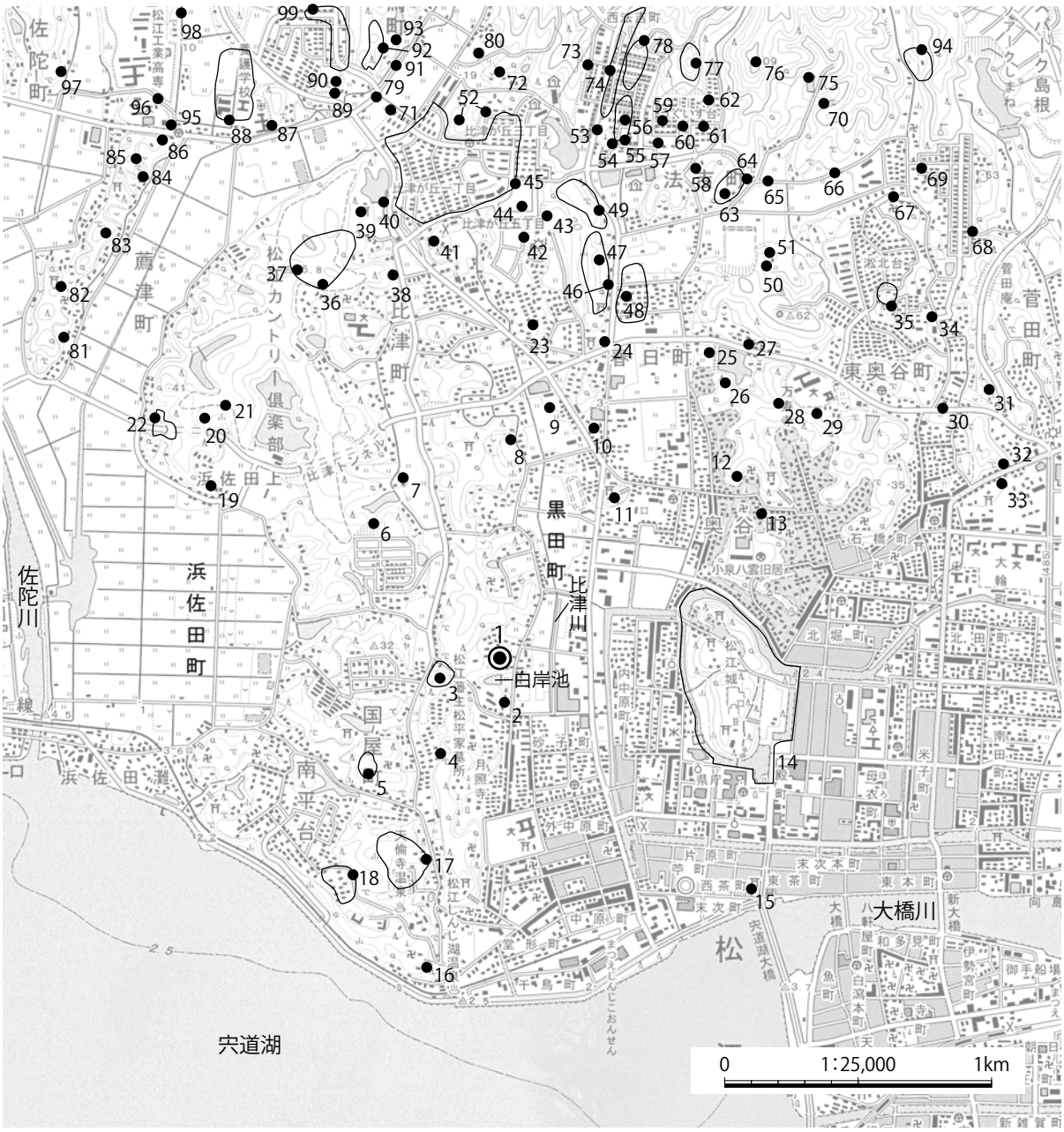
旧石器時代　大門（だいもん）遺跡（80）で安山岩製の尖頭器 1 点、白鹿谷（しらがたに）遺跡（94）で玉髄製の掻器 1 点が採集され、後期旧石器時代後半期の石器と考えられている。

縄文時代　春日（かすが）遺跡（9）、天倫寺（てんりんじ）前遺跡（16）で土器や石器が出土し、法吉（ほっき）遺跡（48）では土器のほかにドングリの集積が確認されている。遺物の散布地として白鹿谷遺跡、紺屋垣（こうやかき）遺跡（71）、藤ヶ森（ふじがもり）遺跡（79）、下（さ）がり松（まつ）遺跡（55）、中代（なかしろ）遺跡（24）が知られている。

弥生時代　田中谷（たなかだに）遺跡（74）、下がり松遺跡で発掘調査が行われ、多くの加工段と竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出され、弥生時代後期には大規模な集落が存在していたことが判明した。風土記でいう佐太水海に臨む石田（いしだ）遺跡（22）の丘陵上では弥生時代中期末～後期、二反田（にたんだ）遺跡（25）では弥生時代後期の竪穴建物跡が検出されている。遺物の散布地として春日遺跡、法吉遺跡、名尾（なお）遺跡（96）、元井手（もといで）遺跡（98）が知られている。

古墳時代　古墳時代前期の古墳は少ないが、かいつき山古墳群（87）、月廻（つきさこ）古墳群（45）、石田（いしだ）古墳（22）が築造されている。石田古墳の主体部には少量の朱が使用され、仿製鏡と玉類が副葬されていた。

古墳時代中期に入ると折廻（おりさこ）古墳群（34）や敷居谷（しきいだに）古墳群（99）など多くの古墳が築造されているが、大半は一辺 10 ～ 20 m程度の小規模な古墳である。しかし、単独で築造された塚山（つかやま）古墳（54）は一辺 33 mの方墳で造出・周濠・外堤を持ち、墳丘上には形象埴輪や円筒埴輪が立てられていた。主体部には仿製鏡のほか短甲・鉄剣・鉄刀・多量の玉類が副葬されており、葬られた人の軍事的性格を窺



1	白岸古墳群	26	田原社跡推定地	51	栗元古墳	76	小白鹿城跡
2	とねり坂横穴墓群	27	煙硝倉古墳	52	阡陌古墳群	77	高つぼ山遺跡
3	舎人遺跡	28	K59遺跡	53	田中谷古墳	78	角谷遺跡
4	向遺跡	29	万寿寺裏山古墳	54	塚山古墳	79	藤ヶ森遺跡
5	荒隈城跡(平成15年度調査)	30	桜埼横穴	55	下がり松遺跡	80	大門遺跡
6	久傳遺跡	31	菅田横穴墓群	56	松崎金一郎所有山林古墳	81	舟津横穴群
7	比津小丸山古墳	32	切通横穴	57	下り松II遺跡	82	北垣古墳
8	黒田下屋敷遺跡	33	赤崎横穴	58	鶯谷古墳	83	高柳城跡
9	春日遺跡	34	折廻古墳群	59	新宮古墳	84	越前古墳
10	法吉小学校裏山横穴墓群	35	ひのさん横穴群	60	伝宇牟加比売命御陵古墳	85	大北古墳
11	摩利支天山横穴墓群	36	ゴルフ場内横穴墓群	61	鶯谷遺跡	86	名尾荒神古墳
12	久米B遺跡	37	ゴルフ場内古墳群	62	下り松I遺跡	87	かいつき山古墳群
13	赤山横穴群	38	水酌崎横穴墓群	63	山槙経塚群	88	半田地下条里制遺跡
14	史跡松江城	39	比津神社脇古墳	64	山槙古墳群	89	山王神社跡
15	茶町遺跡	40	滝戸池脇遺跡	65	長谷歳徳神古墳	90	山王古墳
16	天倫寺前遺跡	41	ひゃくだ横穴	66	なつめ谷荒神古墳	91	桜本古墳
17	荒隈城跡小十太郎地区	42	久米B遺跡	67	岡田薬師古墳	92	桜本古墳群
18	荒隈城跡	43	久米A遺跡	68	松ヶ峠古墳	93	コエ門古墳群
19	東前横穴群	44	久米遺跡	69	二反田古墓	94	白鹿谷遺跡
20	殿山横穴群	45	月廻古墳群	70	コゴメダカ山遺跡	95	名尾ヶ丘古墳
21	古池谷横穴群	46	石在経塚	71	紺屋垣遺跡	96	名尾遺跡
22	石田遺跡	47	唐梅古墳群	72	亀尻古墳群	97	前橋古墳群
23	比津ヶ埼横穴墓群	48	法吉遺跡	73	下り松窯跡推定地	98	元井手遺跡
24	中代遺跡	49	久米古墳群	74	田中谷遺跡	99	敷居谷古墳群
25	二反田遺跡	50	栗元横穴	75	長谷窯跡推定地		

第 2 図　周辺の遺跡分布図 (S=1：25,000)

い知ることができる。

古墳時代後期には、塚山古墳の要素を引き継ぐ伝宇牟加比売命御陵古墳（60）のほか、全長 26 mの前方後方墳である比津小丸山古墳（7）、横穴式石室を主体部に持つ岡田薬師古墳（67）、桜本古墳 (91) などが築造されている。この地域では後期後半以降になると横穴墓が主流を占めるようになる。菅田横穴墓群（31）は最低でも 22 穴で構成された横穴墓群で、1 つの前庭部を複数の横穴墓で共有するものが確認されている。白岸古墳群の近くではこれほど大規模な横穴墓群は見られないが、とねり坂横穴墓群（2）、法吉小学校裏山横穴墓群（10）、摩利支天山横穴墓群（11）、比津ヶ崎横穴墓群（23）、ゴルフ場内横穴墓群 (36)、水酌崎横穴墓群（38）などの多数の分布が見られる。

集落遺跡はあまり調査されていないが、石田遺跡では古墳時代中期の竪穴建物跡 2 棟、久傳遺跡（6）では加工段 4 箇所に古墳時代後期の掘立柱建物跡 6 棟が良好な状況で検出されている。遺物の散布地として大門遺跡が知られている。生産遺跡は調査されていないが、かいつき山古墳から碧玉・瑪瑙片や玉砥石が出土しており、その周辺に玉作遺跡の存在が推察されている。

奈良・平安時代　田中谷遺跡で 18 棟の掘立柱建物跡が検出されており、そのうち 1 棟が大型建物で、集落の中心的建物であったと考えられている。腰帯具（石製巡方）や墨書土器 1 点が出土しており、隣接する下がり松遺跡でも墨書土器 1 点が出土している。そのほか久米遺跡（44）、久米 A 遺跡（43）、久米 B 遺跡（42）で集落跡が確認されており、久米遺跡では大規模な加工段を有する掘立柱建物跡 13 棟、久米 A 遺跡では掘立柱建物跡 2 棟、久米 B 遺跡では掘立柱建物跡 11 棟が検出されている。

中世　下がり松遺跡で鎌倉時代の古墓、二反田古墓（69）で室町時代の宝篋印塔 14 基からなる古墓群が確認されている。法吉町に所在する白鹿山城砦跡群は尼子氏の支城で、「尼子十旗」の中でも特に重要拠点となっていた山城であり、小白鹿城跡（76）、高つぼ山城跡（77）などの要塞で構成されている。荒隈城跡（5・17・18）は毛利元就が尼子氏攻略のために築いた陣城である。城域全体は広大と考えられており、この推定地内で幾度かの断片的な調査が行われている。1979 ～ 80 年の調査では、「一之郭」「二之郭」と呼称される郭・土塁・堀切・階段状遺構などが確認され、「一之郭」の東側では多量のかわらけ（土師器皿）が出土した土器溜りが検出されている。

近世　江戸時代には松江城（14）を中心として、城郭を取り囲むように城下町が整備される。現存している松江城下町絵図を概観すると、白岸古墳群が所在する黒田町周辺一帯には「深田」の記載が見られ、江戸時代を通して比津川周辺の平坦地は田地として利用されていたことが窺える。

丘陵上にある白岸古墳群からは、南に宍道湖、東に松江城天守を望むほか、嵩山から大山まで広い範囲を眺望することができる。

参考文献

加藤義成 1965 『出雲国風土記』

島根県教育委員会 2003 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』

松江考古学談話会 2001 『松江考古第 9 号』

松江市史編纂委員会 2012 『松江市史　史料編 2　考古資料』

松江市法吉公民館 1995 『法吉の歴史あれこれ』

第 3 章　調査の成果

第1節　試掘調査と本調査の概要

第 1 項　試掘調査の概要（第 3 図）

宅地造成事業に先立って、遺跡の有無を確認するために松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査を実施した。調査は、平成 29 年 12 月 19 日～ 20 日に開発計画範囲内において 3 箇所のトレンチ（T1 ～ 3）を設定して重機掘削と手掘りにより試掘を行った。

試掘トレンチの詳細は表 1 に示したが、T1 では遺構を検出していないため、以下では本調査の成果を検証する上で必要な T2・3 の調査の概要と結果について述べる。

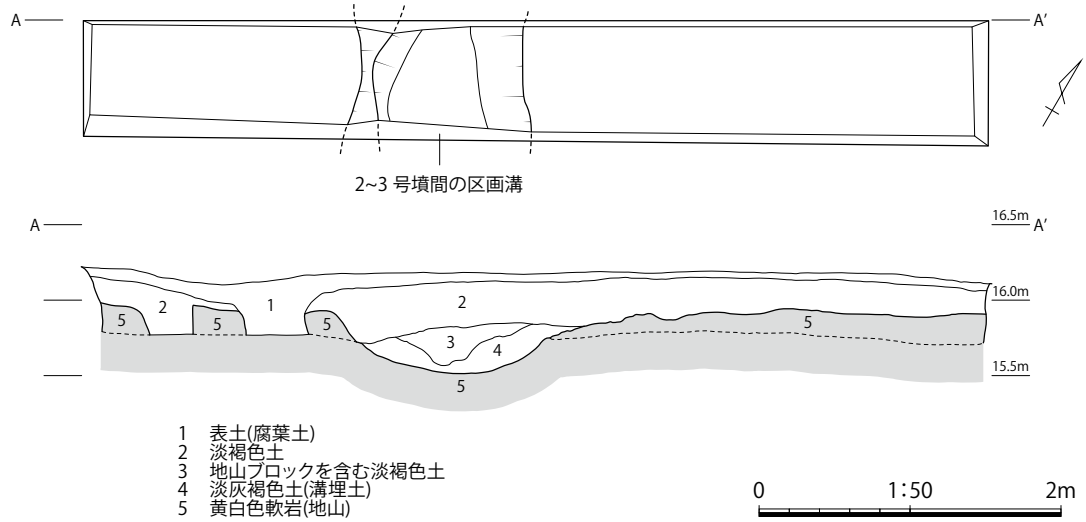
表 1　試掘調査トレンチ一覧

トレンチ	トレンチ設定方向	設定範囲（長軸×短軸）	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
T1	南ー北	3.00m× 1.50m	4.50㎡	45㎝	―	―
T2	南西ー北東	6.00m× 1.20m	7.20㎡	45~65㎝	2 ～ 3 号墳間の区画溝	―
T3	南西ー北東	6.00m× 1.20m	7.20㎡	45~65㎝	1 ～ 2 号墳間の区画溝	―

第 3 図　開発範囲と調査範囲位置図 (S=1：1,000)

（1）T2 トレンチ

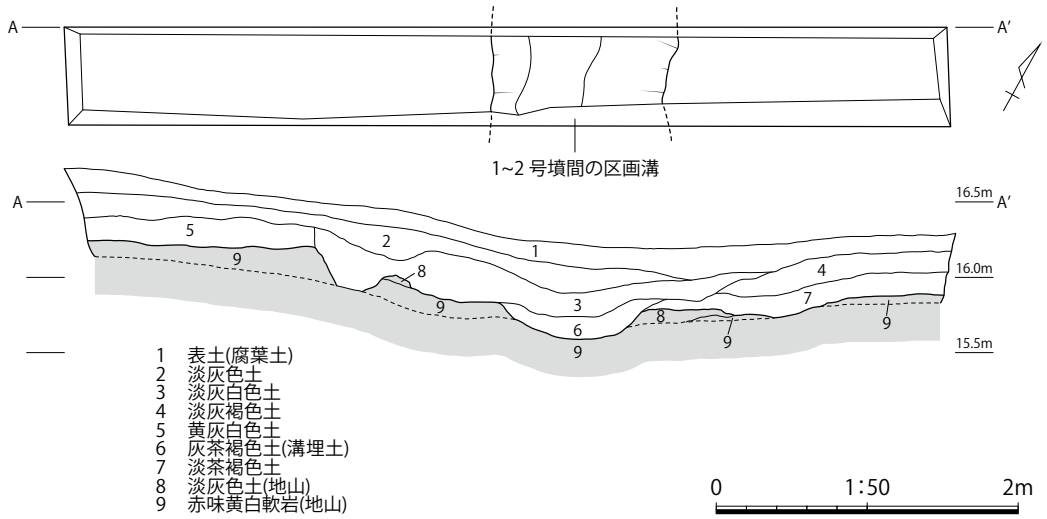
調査の概要（第 4 図）　尾根上にある低い墳丘間に、長さ 6.00 m×幅 1.20 mの規模で南西―北東方向に設定したトレンチである。調査の結果、2 ～ 3 号墳間に位置する区画溝を検出した。区画溝は幅 1.50 m、深さ 0.30 mを測るものであった。このトレンチから遺物は出土していない。



第 4 図　T2 トレンチ平面図・断面図

（2）T3 トレンチ

調査の概要（第 5 図）　T2 トレンチから南西へ 4.00 m離れた場所で、尾根上にある低い墳丘間に、長さ 6.00 m×幅 1.20 mの規模で南西―北東方向に設定したトレンチである。調査の結果、1 ～ 2 号墳間に位置する区画溝を検出した。区画溝は幅 1.00 m、深さ 0.24 mを測るものであった。このトレンチから遺物は出土していない。



第 5 図　T3 トレンチ平面図・断面図

試掘調査の結果、T2 と T3 を設定した丘陵の尾根上に 3 基の古墳が所在することが判明した。見つかった古墳は字名から「白岸古墳群」と呼称し、高所にある南西側から 1 ～ 3 号墳とした。1 号墳は 6.00 m× 6.00 m、2 号墳は 9.00 m× 5.00 m、3 号墳は 6.00 m× 7.00 mの規模と推定される。墳丘はいずれも高さが 1 m未満のものと考えられ、小規模な古墳群といえる。

第 2 項　本調査の方法と経過

開発計画範囲内において松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査を行った結果、遺跡が存在することを確認した。このため、開発計画範囲のうち遺跡に影響がおよぶ範囲について、遺跡の全体像を把握するために本発掘調査を実施した。

発掘調査対象範囲は山林であったため事前に立木の伐採を行い、伐採作業完了後の平成 30 年 4 月 12 日から基準点測量と調査前地形測量を実施した。墳丘および周辺の測量は、10㎝間隔の等高線で測っている。測量作業が完了し、平成 30 年 4 月 16 日から 6 月 20 日まで現地発掘調査を行った。

発掘調査は、1 ～ 3 号墳の各墳丘中央で十字に交差するように土層観察用の畦を設定して、人力により表土を剥ぎ取った段階で遺構の検出を行った。遺構面は精査し、検出遺構の平面・断面図を作成した。墳丘の形状を確認して東西・南北土層図の作成を行った後、土層観察用の畦を取り除いて主体部の調査を行った。主体部検出後は、主体部の主軸方向とそれに直交する軸を設定して、主体部内の縦・横断土層図を作成した。

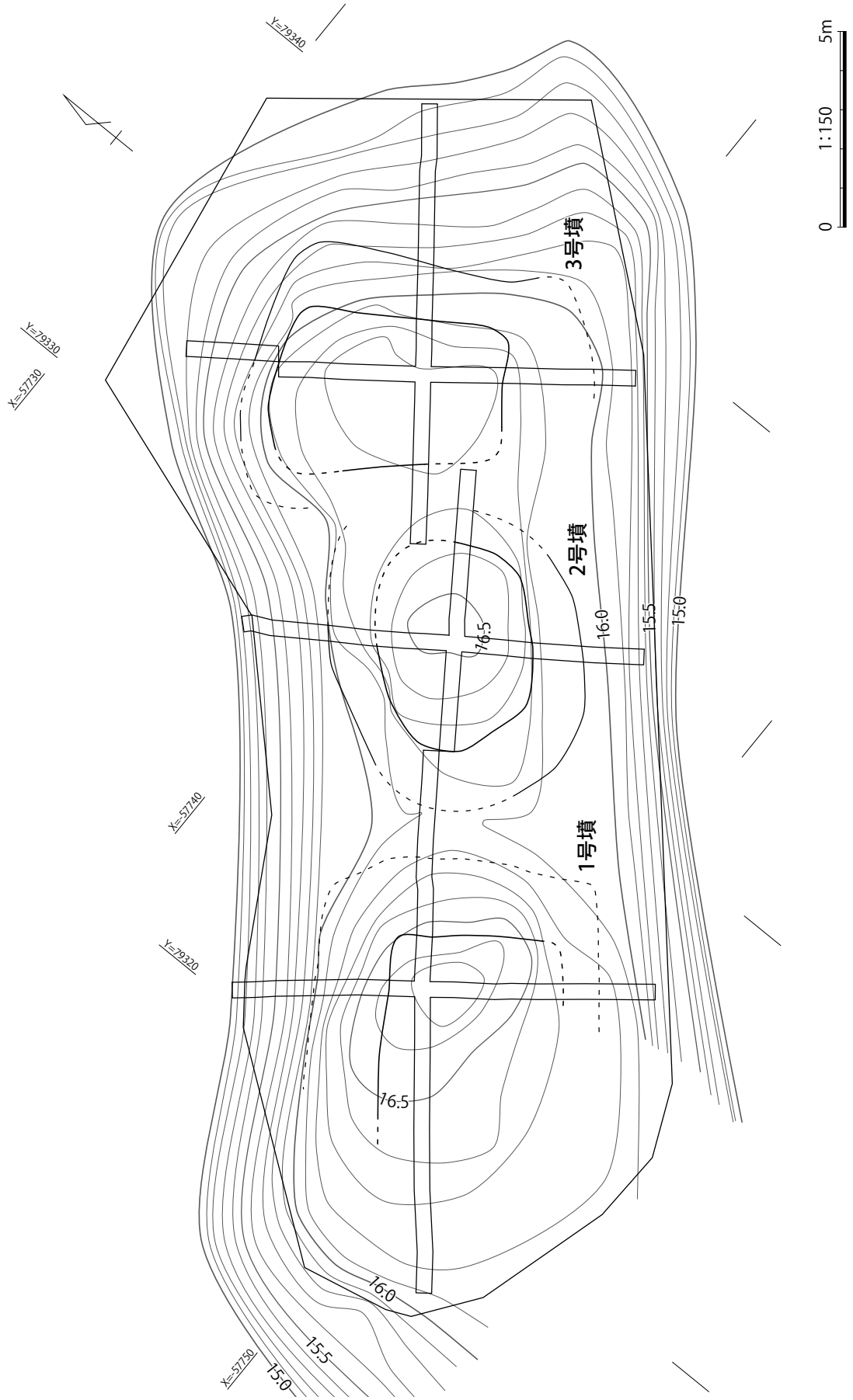
墳丘や遺構の平面測量はトータルステーションを用い、その測量データと遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。方位は、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺 1/20 で作成した。遺構の記録写真は、フルサイズデジタル一眼レフカメラ（Nikon D610）を主に使用し、6 × 7 判フィルムカメラと 35㎜フィルムカメラを授用して撮影を行った。調査区および古墳群の全体写真は、写真撮影用足場を用いて高所からの撮影を実施した。

第 3 項　本調査の概要（第 6・7 図）

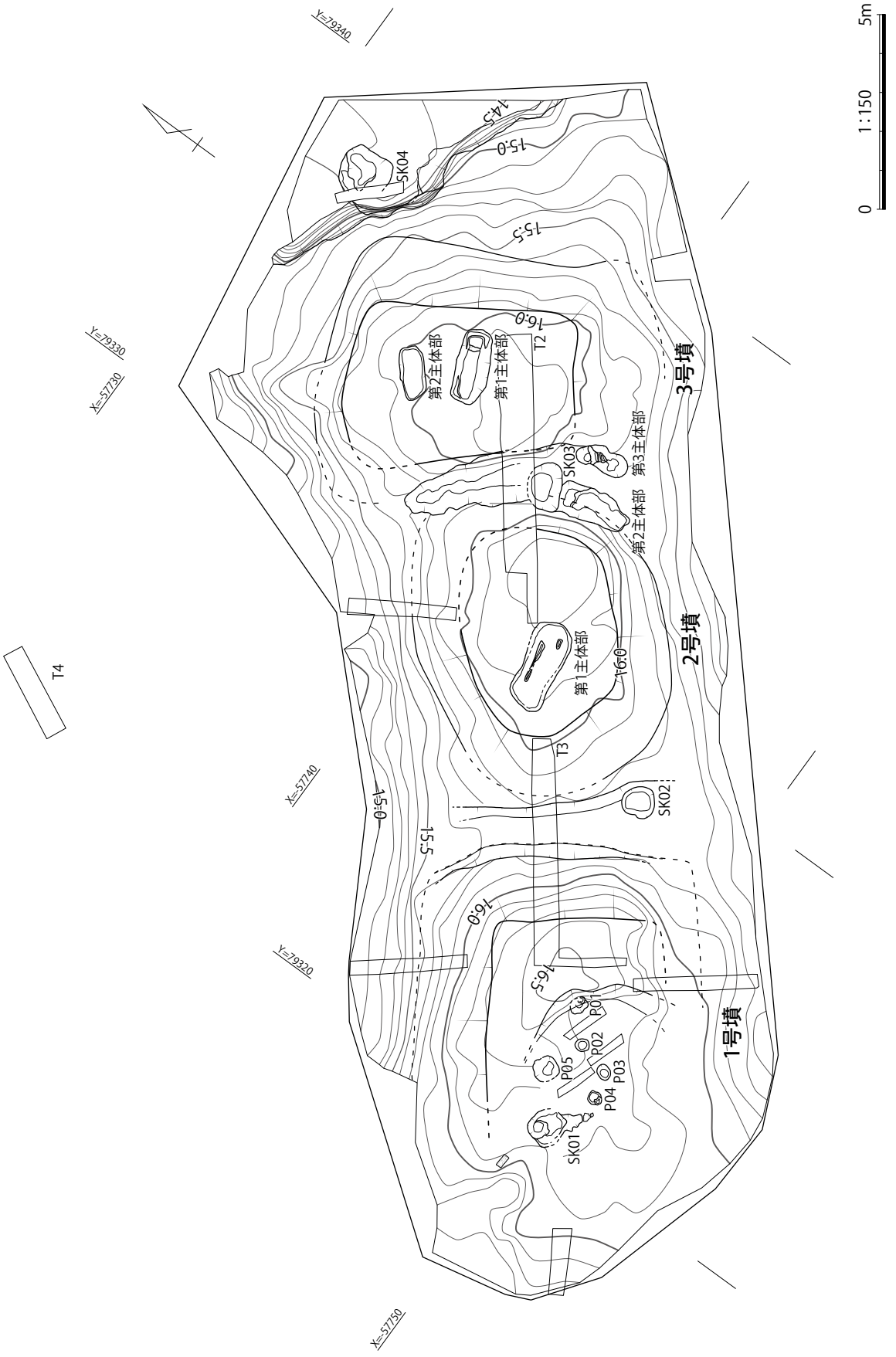
白岸古墳群は丘陵の尾根上に築造された群集墳で、尾根の南西から北東方向に 3 基の古墳が所在している。調査前の地形測量時には 1 ～ 3 号墳は方墳を想定していたが、調査の結果、1・3 号墳は方墳、2 号墳は円墳と考えられた。表土を剥ぎ取ると墳丘面となり、墳丘はいずれの古墳も削り出した地山の上に盛土を施して築造されており、ブラックバンドは確認していない。

1 号墳では、調査前地形測量時に墳丘中央から西側で窪んだ部分を確認しており、この部分では表土を剥ぎ取った面で来待石や鉄釘と平瓦を含む土坑などを検出したことから、近世に削平されているものと考えられた。墳丘東側は残存していたが、主体部は検出できなかった。2 号墳では、墳頂中央からやや西側で主体部を 1 基検出した。また、墳丘東側に位置する 2 ～ 3 号墳間の区画溝内で墳裾主体部を 2 基検出しており、これらは 2 号墳に伴う可能性を考えている。3 号墳では、墳頂平坦面の中央付近から主体部を 2 基検出した。中心主体を第 1 主体部､その北西側を第 2 主体部としている。この他に、墳丘間の区画溝内で土坑や 3 号墳北東側の墳裾付近で風倒木の痕跡を検出した。古墳に伴う遺物は、3 号墳の第 1 主体部と墳丘間の区画溝から須恵器の甕片が出土している。

なお、丘陵の尾根北西斜面では横穴墓の存在の可能性が考えられたため、斜面の下方に 1 箇所のトレンチ（T4）を設定して横穴墓の有無について状況を確認した。その結果、地山面までに堆積する覆土から近世陶磁器が出土したことから、付近に横穴墓は存在していないものと判断した。



第６図　調査前地形測量図 (S=1：150)



第 7 図　1 ～ 3 号墳配置図 (S=1：150)

第 4 項　墳丘の築造と土層（第 8 図）

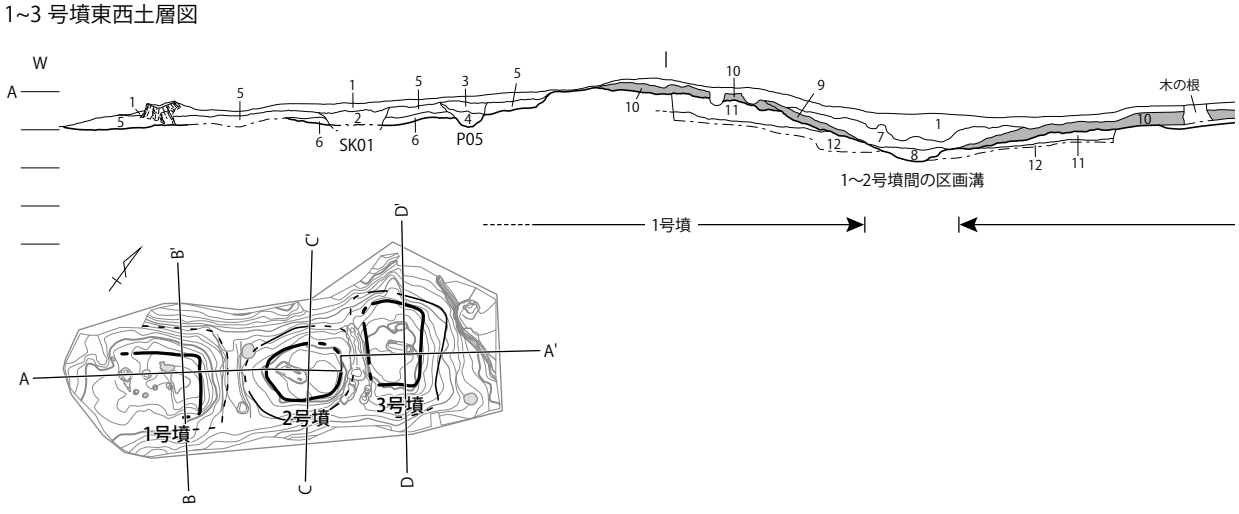
古墳は丘陵の尾根上平坦面に 1 基ずつ縦列する形で並ぶ。1 ～ 3 号墳の各墳丘中央で十字に交差するように畦を設定して土層観察を行った結果、墳丘の層序は上位から表土・墳丘盛土・地山に分かれるものと捉えられた。

1 号墳の墳丘は、地山をほぼ水平に削平した後に盛土を施して築造されている。墳丘の高さは、墳丘中央から西側は削平されているため不明だが、残存していた東側墳裾から現存する墳頂までは 0.80 mを測る。盛土は淡褐色を呈するやや粘性のある土質で、第 8 図に図示した東西土層 A-A' 間の第 9・10 層と南北土層 B-B' 間の第 10 層が墳丘に対応する土層である。

2 号墳の墳丘は、地山をほぼ水平に削平した後に盛土を施して築造されている。墳丘の高さは、西側墳裾から墳頂までは 0.68 m、東側墳裾から墳頂までは 0.55 mを測る。盛土は淡褐色を呈するやや粘性のある土質で、第 8 図に図示した東西土層 A-A' 間と南北土層 C-C' 間の第 10 層が墳丘に対応する土層である。2 号墳の主体部は墳丘盛土中で検出しているが、調査時に検出した主体部の平面プランは明瞭ではなかった。

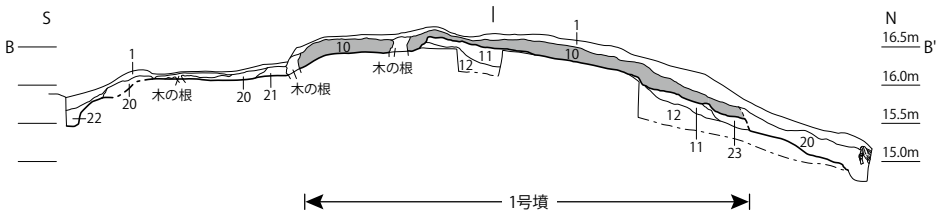
3 号墳の墳丘は、地山を東側に向かって緩やかに傾斜を持たせて削平した後に薄く盛土を施して築造されている。墳丘の高さは、西側墳裾から墳頂までは 0.32 m、東側墳裾から墳頂までは 0.70 mを測る。盛土は淡褐色土に少量の白色の地山ブロックを含む土質で、第 8 図に図示した東西土層 A-A' 間と南北土層 D-D' 間の第 10 層が墳丘に対応する土層である。3 号墳の主体部は墳丘盛土中で検出しているが、墳頂平坦面では盛土が流出して岩脈がむき出しになっている部分があり、主体部は盛土と岩脈を掘り込んで造られたようである。

なお、1 ～ 3 号墳の南側では、延長 27.50 m、幅 2.00 mの東西方向に延びる平坦面を確認している。調査区外の東側には近代まで御堂が存在したとされる平坦地が残っており、確認した平坦面は丘陵の西側から東側の平坦地へ通じる山道の痕跡と考えられた。

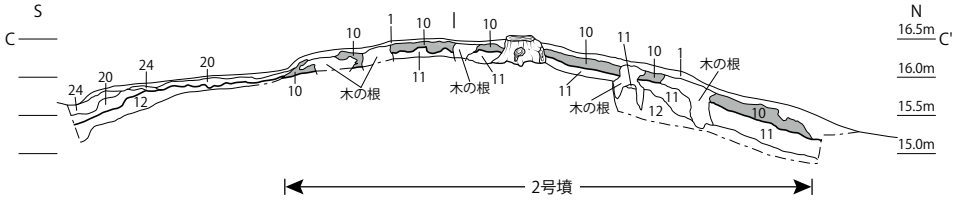


第 8 図　1 ～ 3 号墳東西・南北土層図 (S=1：100)

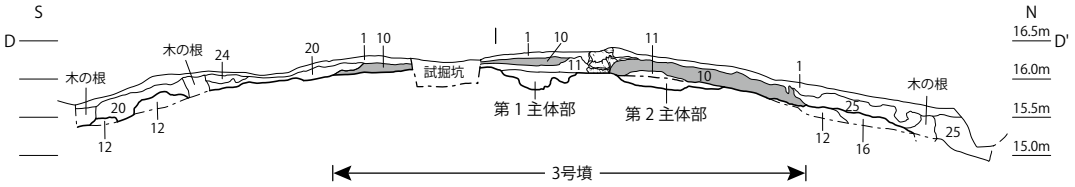
1 号墳南北土層図

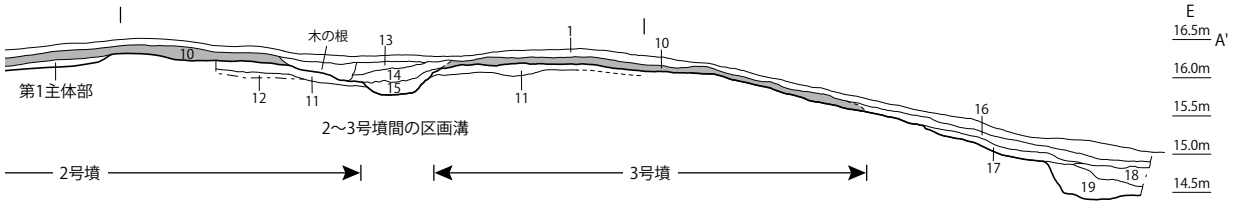


2 号墳南北土層図



3 号墳南北土層図





1　表土(腐葉土)
2　暗茶褐色土(SK01埋土)
3　淡黒色有機物層(P05埋土)
4　暗灰色土(P05埋土)
5　黄褐色土(白色地山ブロック含む)
6　淡黄褐色土
7　暗灰褐色土
8　桃味白色軟岩(溝埋土)
9　茶灰色土(墳丘盛土)
10　淡褐色土(墳丘盛土)
11　明黄褐色土(地山)
12　赤味黄白色軟岩(地山)
13　暗茶灰色土
14　淡橙褐色土
15　明褐色土(溝埋土)
16　橙褐色土と白色粘土ブロックの混合土
17　暗黄褐色土
18　桃味白色軟岩と橙褐色土の混合土
19　橙褐色土(黄白色軟岩含む)
20　灰褐色土
21　黄褐色土と白色軟岩の混合土
22　黒褐色土
23　明黄色土
24　暗褐色土
25　黄褐色土と白色粘土ブロックの混合土

※土層番号は東西・南北土層図共通

…墳丘盛土

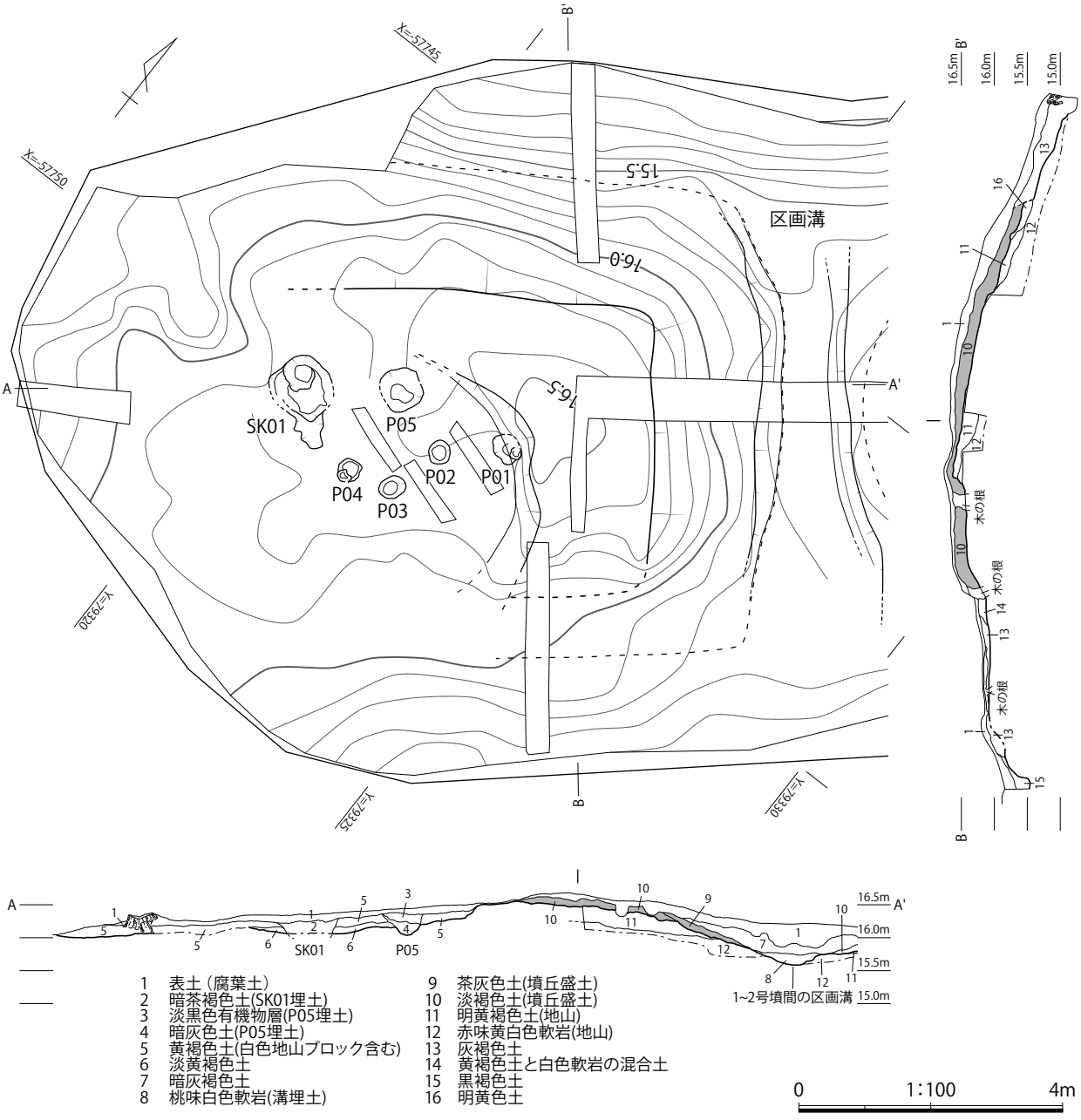
0　1:100　5m

第２節　１号墳

第１項　墳丘（第９図）

１号墳は、南西から北東方向に延びる尾根上の南西側にあり、墳頂標高は 16.62 ｍで白岸古墳群中最高所に位置する。墳丘中央から西側は一部を抉られる形で削平され、墳頂平坦面は原形を留めていなかったが、東側は原形を留めていた。墳形は方墳を推定しており、墳丘の規模は明確ではないが尾根主軸方向に長辺約 9.80 m、尾根直交方向に短辺約 7.30 m、高さ 0.80 mを測るものと想定している。墳頂平坦面の広さは、墳丘中央から西側が削平されているため不明である。

調査は墳丘の全体を対象とし、墳丘土層を観察するため十字の畦を残して、墳丘面が確認されるまで全体を平面的に掘り下げていった。墳丘は削り出した地山の上に盛土を施して築造されており、表



第９図　１号墳墳丘測量図・土層図

土から 15㎝前後掘り下げた時点で墳丘面に到達した。墳丘西側では墳端を明確には確認できなかったが、東側の墳端は尾根筋に直交する溝によって区画されていた。1 ～ 2 号墳間の区画溝については本節第 2 項で詳述するが、1 号墳の東側に隣接する 2 号墳と溝を共有しており、土層断面からは溝の明確な切り合いは確認できず、古墳の前後関係を明らかにし得なかった。

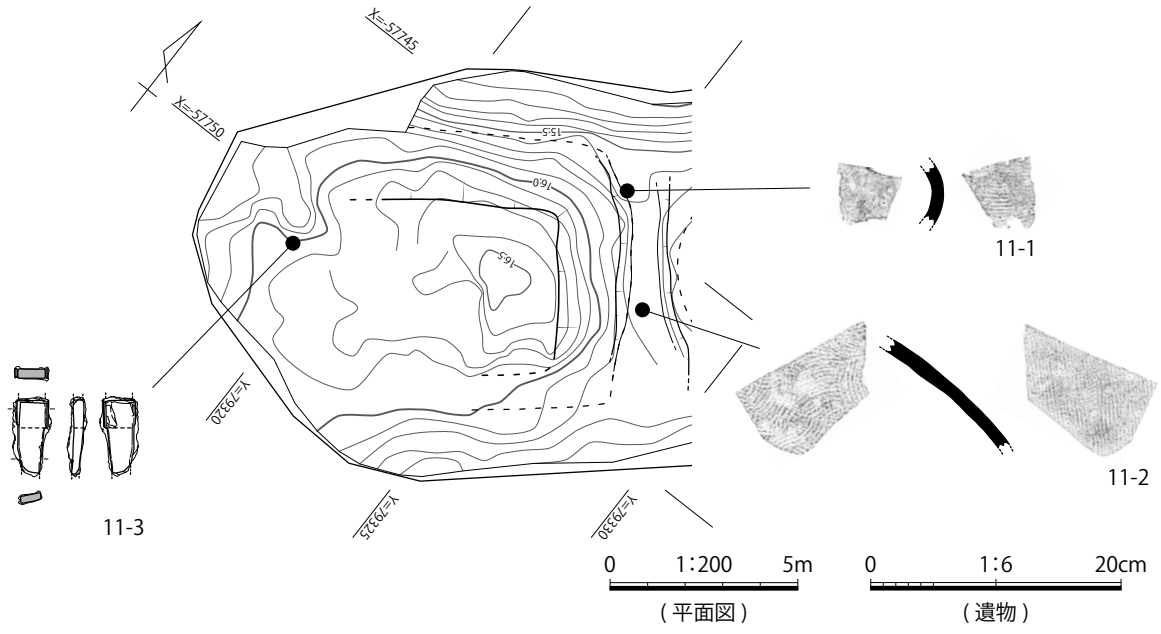
主体部は墳頂平坦面の中央付近にあるものと想定し、墳丘面の精査やサブトレンチを設定して検出を試みたが、主体部の平面プランや墳頂断面での掘り込み痕跡は確認できなかった。この結果から、墳丘中央から西側が削平された段階に主体部も削平されているものと判断した。

第 2 項　区画溝（第 9 図）

墳丘の東側で 1 ～ 2 号墳間の区画溝を検出した。尾根筋に直交するように北西から南東方向に延びる溝である。規模は長さ 6.20 m、幅 1.40 m、深さ 0.16 mを測り、断面形は緩やかな U 字状を呈して掘り込みは浅く、溝底は地山面を削り出す。溝底の検出標高は 15.65 ～ 15.75 mで、溝底と 1 号墳墳頂との比高は 0.97 mを測る。区画溝の覆土には桃味白色軟岩が堆積し、この覆土上面から須恵器片が出土した。

第 3 項　遺物出土状況（第 10 図）

ここでは、1 号墳周辺の遺物出土状況を図示する。古墳に伴う遺物は、1 ～ 2 号墳間の区画溝内の覆土上面から須恵器片が 2 点（11-1・2）、墳丘西側の平坦面から大刀の茎部と考えられる金属片が 1 点（11-3）出土した。なお、図示した金属片の出土位置は、墳丘の西側が削平された段階に移動した後の位置を示している可能性があるが、古墳に伴う遺物と考えられることからここに含めている。

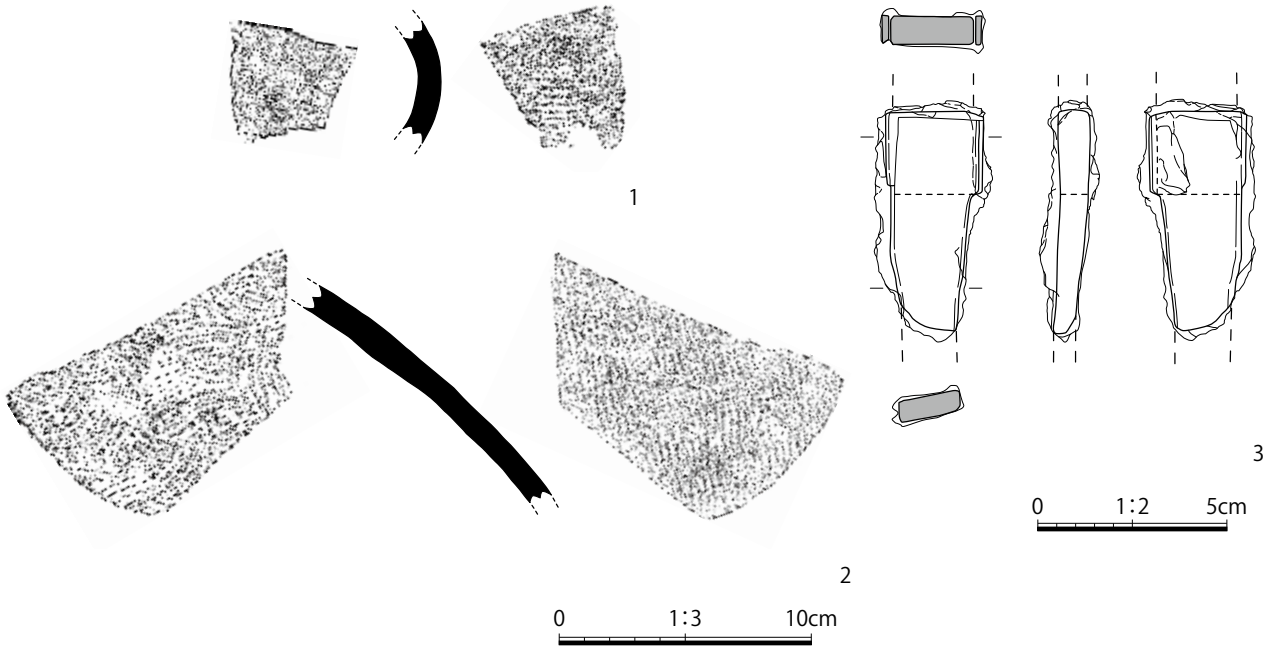


第 10 図　1 号墳周辺遺物出土状況平面図

第４項　出土遺物（第 11 図）

出土した須恵器はいずれも破片である。11-1 は壺甕類の一部と考えられるが、器形から焼き歪みの可能性がある。外面には平行のタタキ目が見られ、わずかに自然釉が付着する。内面の当て具痕は丁寧に消されている。11-2 は大甕の肩部片である。外面には平行のタタキ目が見られ、自然釉が付着する。内面には青海波文のタタキ目が見られ、タタキ目はやや粗くスリ消されている。大谷編年出雲 1 期中段階の範疇のもので、5 世紀後半～末（TK23・47 並行期）のものと考えられる(1)。

11-3 は大刀の茎部と考えられる金属片である。茎尻は欠損し、錆膨れがあるが残存長 6.3㎝、幅 3.1㎝、厚さ 1.0㎝を測る。茎口側には長さ 2.0㎝、幅 2.6㎝、厚さ 1.5㎜の方形の鎺（はばき）がつく。鎺の下方に関（まち）が確認でき、形状は片関で斜角関と考えられる。茎部に目釘孔はなく、木質等は残存していない。



第 11 図　１号墳周辺出土遺物

第５項　近世の遺構と遺物

１号墳は前述したように、墳丘の一部を抉られる形で削平されている部分がある。この部分は墳丘中央から西側に向けて東西約 5.50 m、南北約 5.20 mの範囲で平坦面が造り出されており、この面で来待石や鉄釘と平瓦を含む土坑などを検出したことから、墳丘は近世に削平されているものと考えられた。ここでは、墳丘中央から西側の平坦面で検出した近世の遺構と遺物について取り扱う。

遺構は、土坑を１基（SK01）、ピットを５穴（P01 ～ 05）検出した。ピットは柱穴と考えられるものも含まれるが、表土を剥ぎ取った段階で検出しているため、深さが浅いピットは上層から掘り込まれた遺構の底部を図示している可能性がある。以下では土坑とピット群の項目に分けて詳述する。

（1）土坑

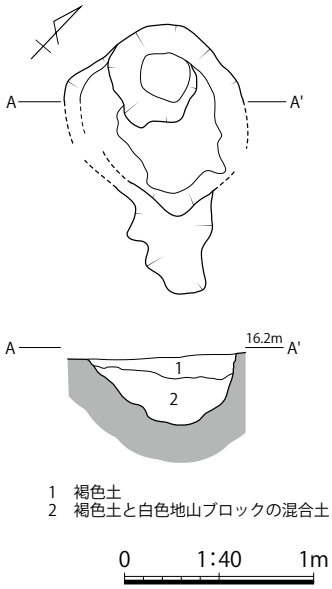
SK01（第 12 図）　SK01 は、ピット群の北西側に位置する土坑である。平面形は歪んだ円形を呈し、平坦な底面から開き気味に立ち上がる壁面をもつ。検出面は標高 16.16 mで、規模は上縁長軸 1.42 m、

短軸 0.92 m、深さ 0.36 mを測る。埋土は上層から褐色土(第 1 層)、褐色土と白色地山ブロックの混合土（第 2 層）が堆積する。上層の褐色土から鉄釘と平瓦が出土している。

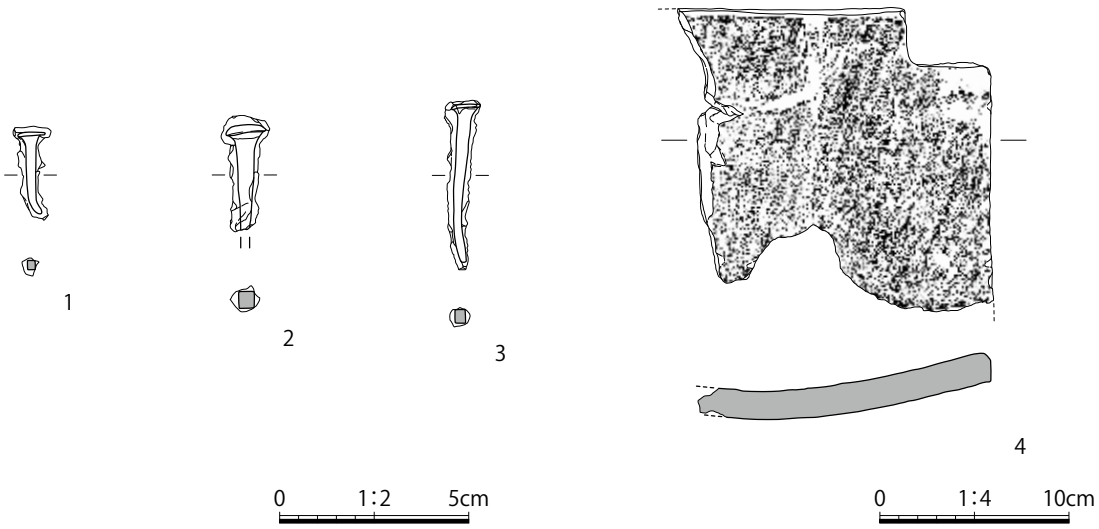
遺構の性格は、土坑の形状や出土遺物から廃棄土坑の可能性が考えられる。SK01 の時期は、近世に属する遺構と考えるが明確な時期は定かではない。

SK01 出土遺物（第 13 図） 遺物は、SK01 の埋土から鉄釘が 3 点と平瓦が 1 点出土した。13-1 ～ 3 は鉄釘である。鉄釘は長短の差はあるものの、いずれも頭巻の角釘である。頭部はほぼ直角に折り曲げられ、身に比べやや幅広に仕上げられている。身の断面は正方形を呈し、13-1 は 1 寸、13-2・3 は 1 寸半を意図して作られたものと考えられる。

13-4 は平瓦である。尻側に切り込みが入るもので、頭側は欠損している。厚さ 1.5㎝で、凸面に離砂が付着する。



第 12 図　SK01 平面図・断面図



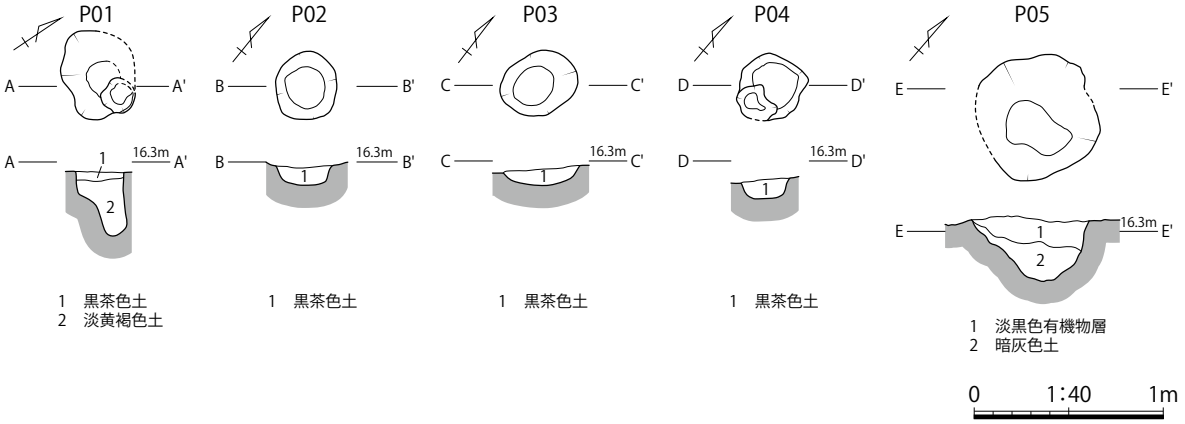
第 13 図　SK01 出土遺物

(2) ピット群

P01 ～ 05（第 14 図） P01 ～ 05 は、SK01 の南東側に位置するピット群である。P01 と P05 は断面形から柱穴の可能性も考えられたが、検出状況から建物を構成する柱穴や遮蔽施設に伴う柱穴なのか規則性を見出せず、遺構の性格や用途は不明である。そのため、ここではピット群として取り扱い、以下に個々のピットについて規模と形態を述べる。

P01 は歪んだ円形を呈し、上端径 0.26 m、下端径 0.12 m、深さ 0.34 mを測る。埋土は上層から黒茶色土(第 1 層)、淡黄褐色土(第 2 層)が堆積する。P02 は円形を呈し、上端径 0.28 m、下端径 0.22 m、深さ 0.10 mを測る。埋土は黒茶色土（第 1 層）が堆積する。P03 は円形を呈し、上端径 0.39 m、下端径 0.26 m、深さ 0.10 mを測る。埋土は黒茶色土(第 1 層)が堆積する。P04 は歪んだ円形を呈し、

上端径 0.24 m、下端径 0.18 m、深さ 0.10 mを測る。埋土は黒茶色土（第 1 層）が堆積する。P05 は円形を呈し、上端径 0.62 m、下端径 0.25 m、深さ 0.34 mを測る。埋土は上層から淡黒色有機物層（第 1 層）、暗灰色土（第 2 層）が堆積する。いずれも柱痕跡や礎盤石は伴わず、遺物は出土していない。



第 14 図　P01 ～ 05 平面図・断面図

第３節　２号墳

第１項　墳丘（第 15 図）

２号墳は 1 号墳と 3 号墳の間にあり、墳頂標高は 16.36 mで南西から北東方向に延びる尾根上の中央に位置する。墳形は円墳で、墳丘の規模は直径約 8.20 m、高さ 0.68 mを測る。

調査は墳丘の全体を対象とし、墳丘土層を観察するため十字の畦を残して、墳丘面が確認されるまで全体を平面的に掘り下げていった。墳丘は削り出した地山の上に盛土を施して築造されており、表土から 12㎝前後掘り下げた時点で墳丘面に到達した。

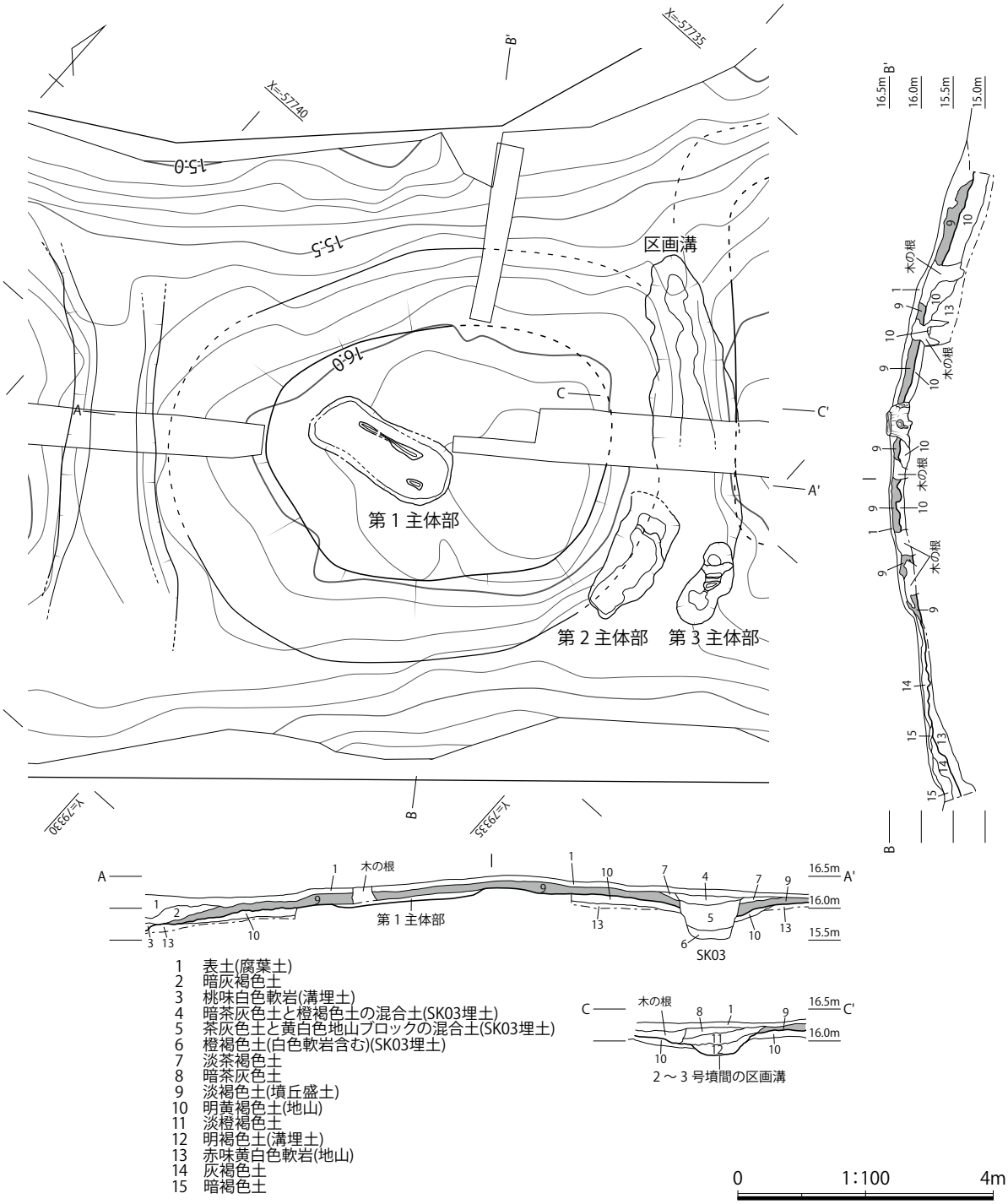
墳丘北側の尾根斜面側では墳端を明確には確認できなかったが、尾根筋に直交する溝によって東西の両側が区画されていた。２～３号墳間の区画溝については本節第２項で詳述するが、西側は２号墳に隣接する 1 号墳と溝を共有しており、東側は第 15 図 C-C' 間の土層断面から 3 号墳の西側墳端が区画溝で切られている堆積が見られ、古墳の前後関係は 3 号墳（古）－２号墳（新）と考えられた。

主体部は、墳頂中央からやや西側で素掘りの墓壙を 1 基（第 1 主体部）検出した。調査時に検出した平面プランは明瞭ではなく、掘り込みも浅いことから、明確に主体部と判断できる根拠は得られていない。また、主体部の掘り込み面は墳丘盛土の流出とともに失われている可能性もある。

なお、墳丘東側に位置する２～３号墳間の区画溝内では墳裾主体部を２基（第２・３主体部）検出したが、これらは区画溝の溝底精査中に墓壙の底部付近を確認したものである。第２・３主体部の掘方上端は明瞭ではなかったが、墳丘精査中に第２主体部の西側上端では２号墳の東側墳裾と切り合う形で墓壙が掘り込まれている状況を確認している。規模は異なるが両墓壙とも同じ主軸方位を指向しており、形態が似ることや床面から想定される掘り込み面から、ほぼ同一の時期に掘り込まれた墓壙と判断した。

第 2 項　区画溝（第 15 図）

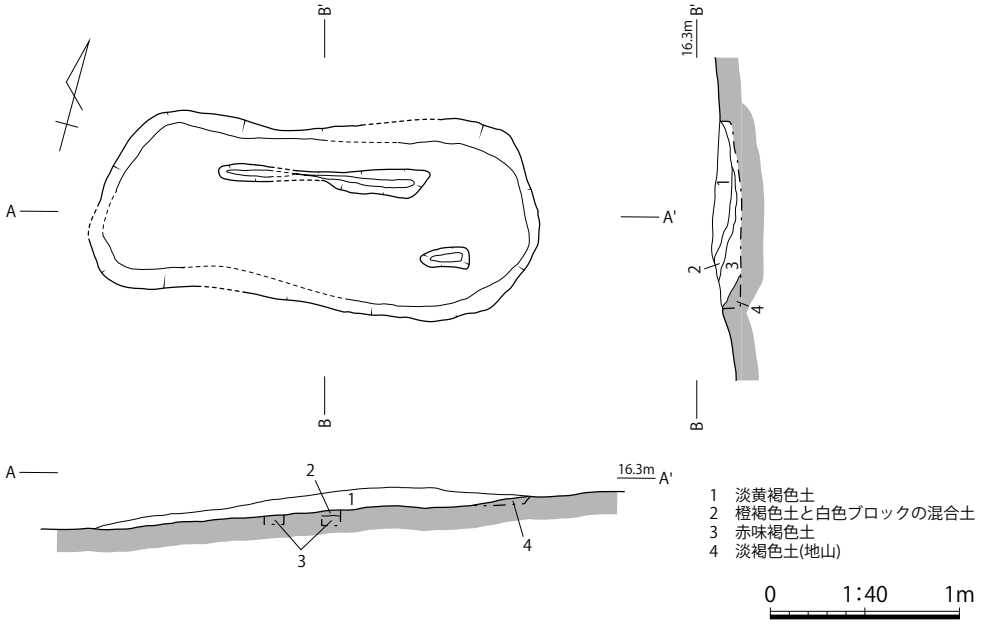
墳丘の東側で 2 ～ 3 号墳間の区画溝を検出した。尾根筋に直交するように北西から南東方向に延びる溝である。この溝は 2 号墳の墳丘東側の墳端に沿う形で緩やかな弧を描くように近接し、3 号墳の西側墳端を切り込んで掘削していることから、2 号墳に伴う溝と考えられる。規模は長さ 5.70 m、幅 1.36 m、深さ 0.16 mを測り、断面形は緩やかな U 字状を呈して掘り込みは浅く、溝底は地山面を削り出す。溝底の検出標高は 15.57 ～ 15.78 mで、溝底と 2 号墳墳頂との比高は 0.79 mを測る。区画溝の覆土には明褐色土が堆積し、この覆土上面から須恵器片が出土した。



第 15 図　2 号墳墳丘測量図・土層図

第３項　２号墳主体部

第１主体部（第 16 図）　２号墳の墳頂中央からやや西側で検出した素掘りの墓壙である。平面形は長楕円形を呈し、主軸方位はＥ－ 12°－Ｎで尾根方向と斜交する。平面プランは標高 16.23 ｍで検出し、規模は長辺 2.35 ｍ、短辺 0.92 ｍ、深さ 0.13 ｍを測る。検出した墓壙は掘り込みが浅いもので、本来の掘り込み面は墳丘盛土の流出とともに失われている可能性があることから、残存していた墓壙の掘方の底部を検出しているものと考えられた。墓壙内や墓壙上面から遺物の出土はなかった。



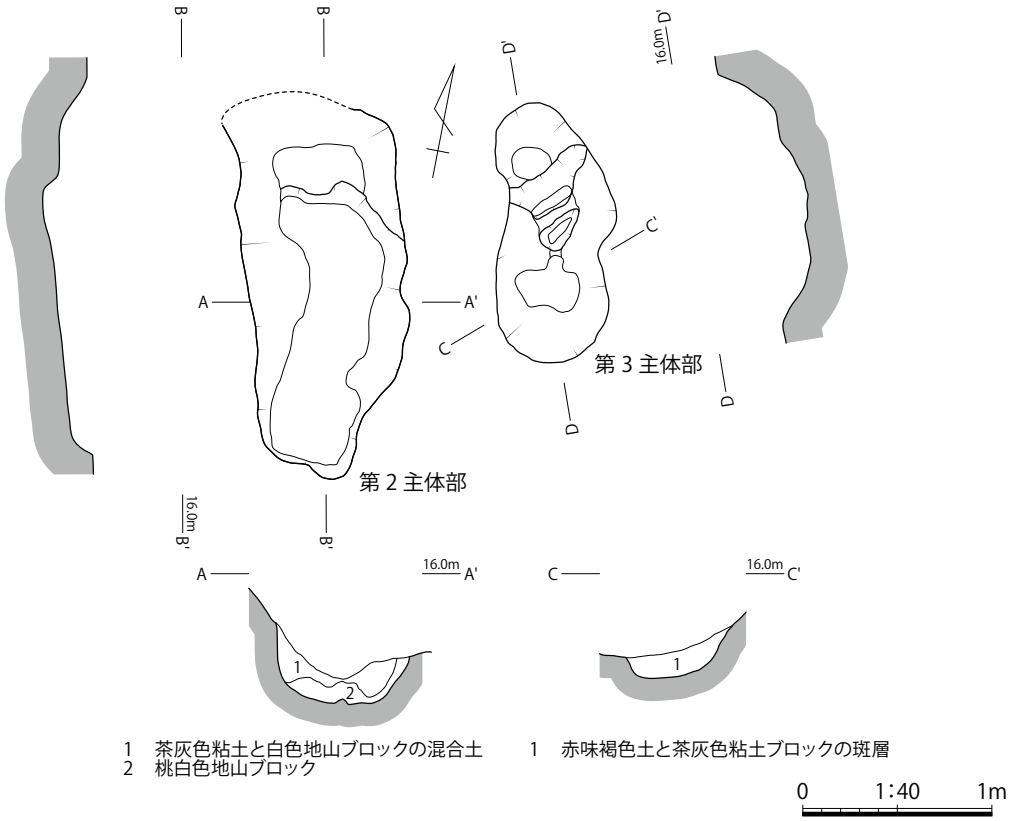
第 16 図　２号墳第１主体部実測図

第２・３主体部（第 17 図）　２号墳の墳丘東側で検出した墳裾主体部とした墓壙である。墓壙の掘方上端は明瞭ではなかったが、墳丘精査中に第２主体部の西側上端では２号墳の東側墳裾と切り合う形で墓壙が掘り込まれている状況を確認した。また、墓壙の底部付近は区画溝の溝底と切り合う形で確認している。

第２主体部は、２号墳の東側墳裾で検出した素掘りの墓壙である。平面形は長方形を呈し、主軸方位はＮ－ 12°－Ｗで尾根方向に直交する。平面プランは標高 15.57 ｍで検出し、規模は長辺 2.02 ｍ、短辺 0.82 ｍ、検出面から深さ 0.31 ｍを測る。墓壙の床面は南側がわずかに高くなっており、頭位方向は南側と推測される。墓壙内から遺物の出土はなかった。

第３主体部は、第２主体部の東側で検出した素掘りの墓壙である。平面形は長楕円形を呈し、主軸方位はＮ－ 12°－Ｗで第２主体部と平行する。平面プランは標高 15.62 ｍで検出し、規模は長辺 1.36 ｍ、短辺 0.60 ｍ、検出面から深さ 0.14 ｍを測る。第２主体部と比べて規模が小さく、小児用の墓壙の可能性が考えられる。墓壙内から遺物の出土はなかった。

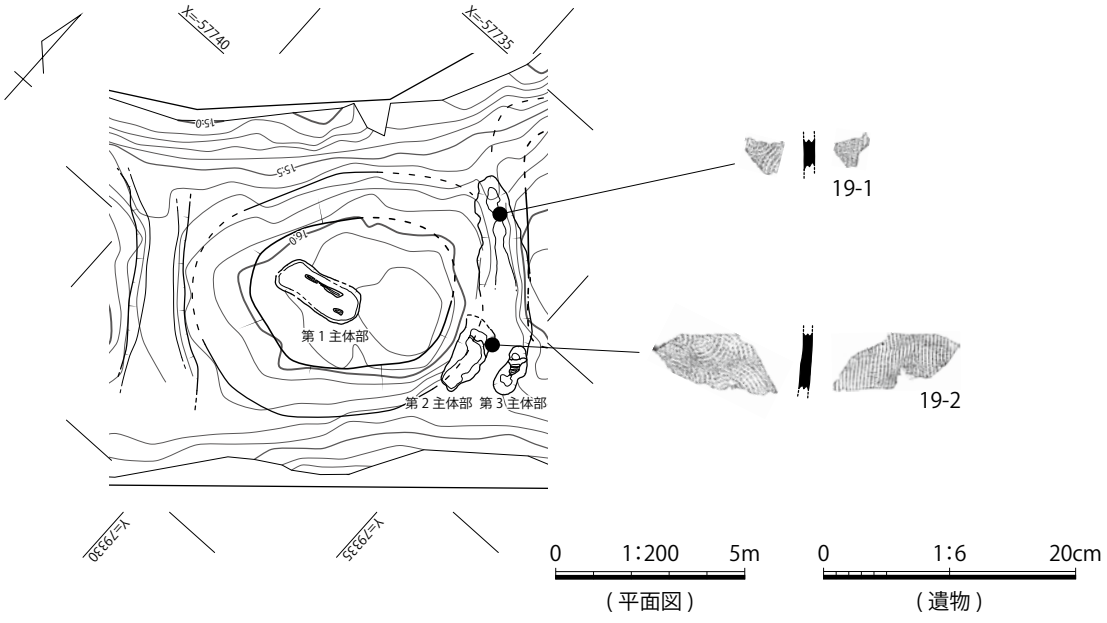
第２・３主体部は明確な根拠はないものの、形態が似ること・軸方位が揃うこと・床面から想定される掘り込み面から、ほぼ同一の時期に掘り込まれた墓壙と考えられ、墳裾に造られることから副次的な被葬者のものと推定される。また、第２主体部は２号墳の東側墳裾を切り込んで墓壙が掘り込まれていることから、古墳との前後関係は２号墳（古）－第２・３主体部（新）と考えられた。



第 17 図　2 号墳第 2・3 主体部実測図

第 4 項　遺物出土状況（第 18 図）

ここでは、2 号墳周辺の遺物出土状況を図示する。古墳に伴う遺物は、主体部や墳丘面からは出土せず、2 ～ 3 号墳間の区画溝内の覆土上面から須恵器片が 2 点（19-1・2）出土した。



第 18 図　2 号墳周辺遺物出土状況平面図

第５項　出土遺物（第 19 図）

須恵器は甕が出土しているが、いずれも破片である。19- １・2 は甕の胴部片である。外面には格子状の、内面には青海波文のタタキ目が見られ、内面のタタキ目はスリ消されている。これらの須恵器は大谷編年出雲 1 期の範疇のものと考えられる。

第 19 図　2 号墳周辺出土遺物

第４節　３号墳

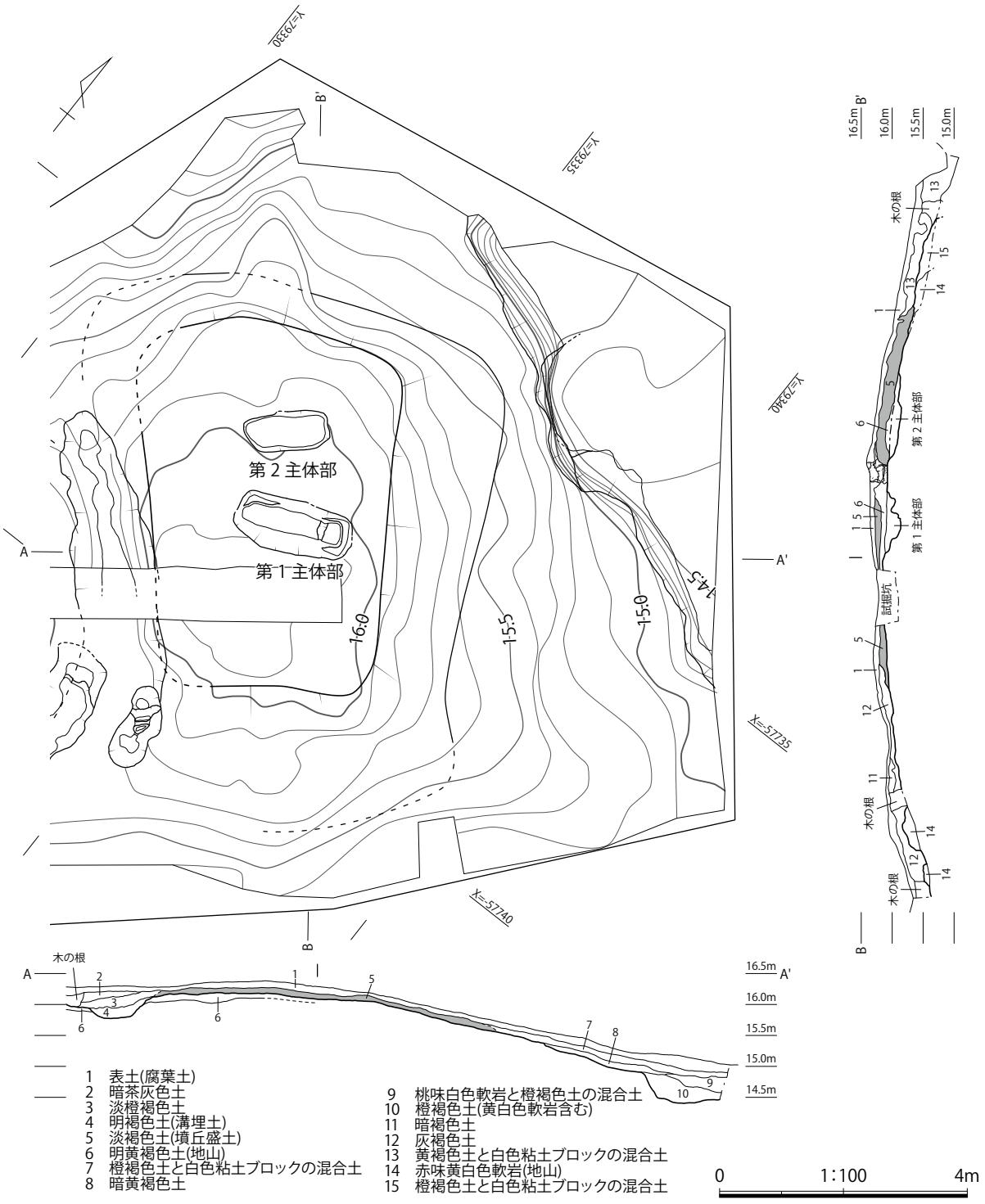
第１項　墳丘（第 20 図）

３号墳は２号墳の東側に隣接し、墳頂標高は 16.27 ｍで南西から北東方向に延びる尾根上の北東側に位置する。墳形は方墳で、墳丘の規模は尾根直交方向に長辺約8.80ｍ、尾根主軸方向に短辺約6.20ｍ、高さ 0.70 ｍを測る。墳頂平坦面は南北方向に約 5.90 ｍ、東西方向に約 3.80 ｍの広さをもつ。

調査は墳丘の全体を対象とし、墳丘土層を観察するため十字の畦を残して、墳丘面が確認されるまで全体を平面的に掘り下げていった。墳丘は東側に向かって緩やかに傾斜を持たせて削平した後に盛土を施して築造されており、表土から 10㎝前後掘り下げた時点で墳丘面に到達した。墳丘盛土は 1・2 号墳に比べて薄く、墳頂平坦面では盛土が流出して岩脈がむき出しになっている部分があり、墳丘東側ではわずかに墳端のアクセントが確認できる程度であった。

墳丘南側では墳端を明確には確認できなかったが、西側は第 20 図 A-A' 間の土層断面から墳端が区画溝で切られている堆積が見られ、古墳の前後関係は３号墳（古）－２号墳（新）と考えられた。また、３号墳を平面的に見ても墳丘西側の墳端は区画溝で切られている状況が看取され、３号墳は２号墳に先行して築造された古墳と捉えることができる。

主体部は、墳頂平坦面中央から中心主体となる第１主体部とその北西側から第２主体部を検出した。第２主体部は第１主体部から 1.50 ｍ離れた位置で検出している。主体部はいずれも素掘りの墓壙で、第１主体部は墳丘にやや斜交し、第２主体部は尾根方向に軸を合わせている。古墳の主たる被葬者は墳頂平坦面中央に占地する第１主体部であり、第２主体部は第１主体部に比べて規模が小さく、墳頂中央からやや離れた位置に造られることから、副次的な被葬者のものと推定される。なお、第２主体部は掘り込みが浅いもので、前述のように墳丘盛土の流出が考えられるため、墓壙の掘方も本来の掘り込み面より下がったレベルで検出している可能性がある。

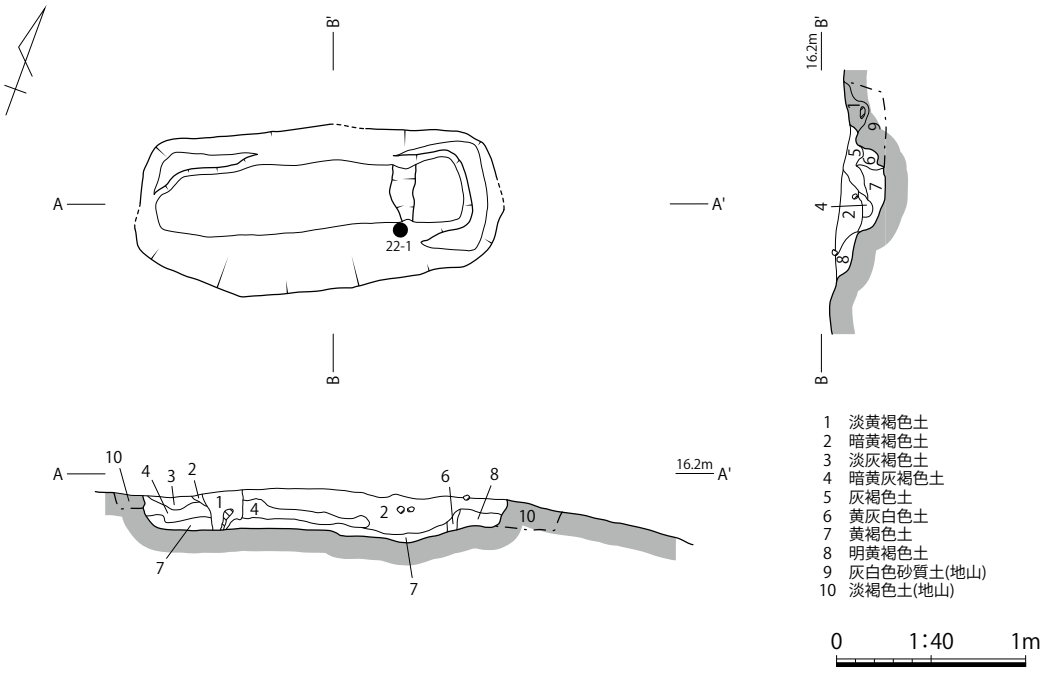


第 20 図　3 号墳墳丘測量図・土層図

第 2 項　3 号墳主体部

第 1 主体部（第 21 図）　墳頂平坦面中央から検出した素掘りの墓壙で、3 号墳の中心主体である。平面形は長楕円形を呈し、主軸方位は E － 22° － N で墳丘にやや斜交する。平面プランは標高 16.13 mで検出し、規模は長辺 1.95 m、短辺 0.86 m、深さ 0.25 mを測る。

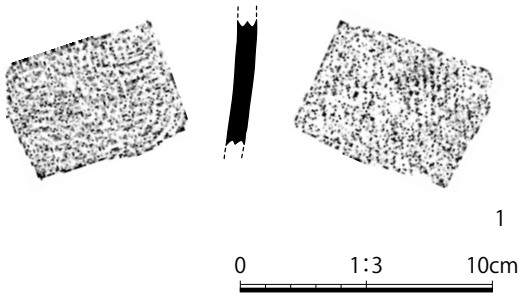
調査は主体部の主軸方向とそれに直交する軸を設定して、土層を確認しながら四分方で平面的に掘り下げて行った。墓壙覆土内には地山岩盤ブロックが混入しており、盛土と岩脈を掘り抜いた墓壙の掘削土をそのまま埋め戻したものと考えられる。墓壙断面や床面で棺を設置した痕跡は見られなかったが、床面の検出標高は西側が標高 15.90 m、東側が標高 15.84 mを測り、西側がわずかに高くなっていることから、頭位方向は西側と推測される。遺物は、墓壙検出面から須恵器片が出土した。



第 21 図　3 号墳第 1 主体部実測図

第 1 主体部出土遺物（第 22 図）

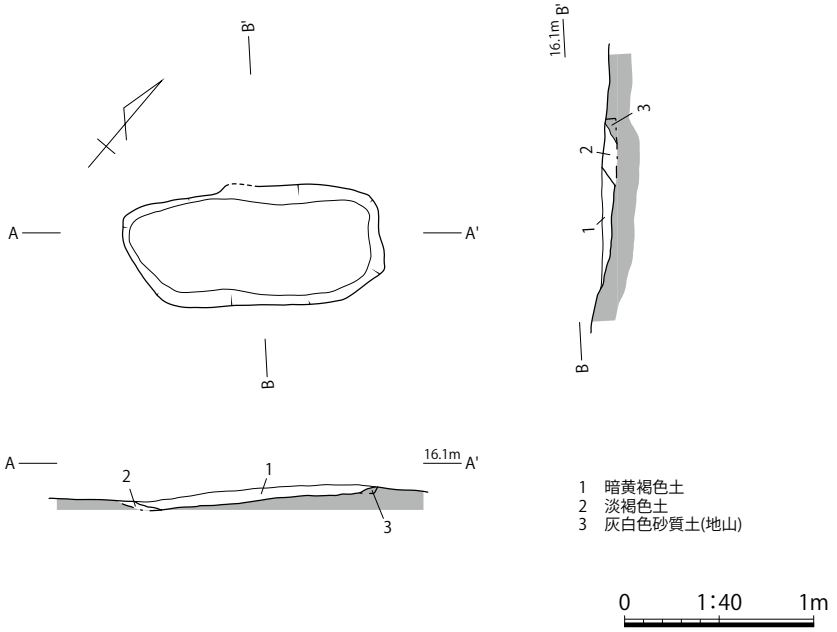
遺物は、主体部内の南東側、墓壙検出面から出土した須恵器片である。22-1 は甕の胴部片である。外面には格子状の、内面には青海波文のタタキ目が見られ、内面のタタキ目はスリ消されている。大谷編年出雲 1 期の範疇のものと考えられる。



第 22 図　第 1 主体部出土遺物

第 2 主体部（第 23 図）　第 1 主体部から北西側に 1.50 m離れた位置で検出した素掘りの墓壙である。平面形は長楕円形を呈し、主軸方位は E － 42° － N で尾根方向に軸を合わせている。平面プランは標高 15.98 mで検出し、規模は長辺 1.34 m、短辺 0.64 m、深さ 0.08 mを測る。

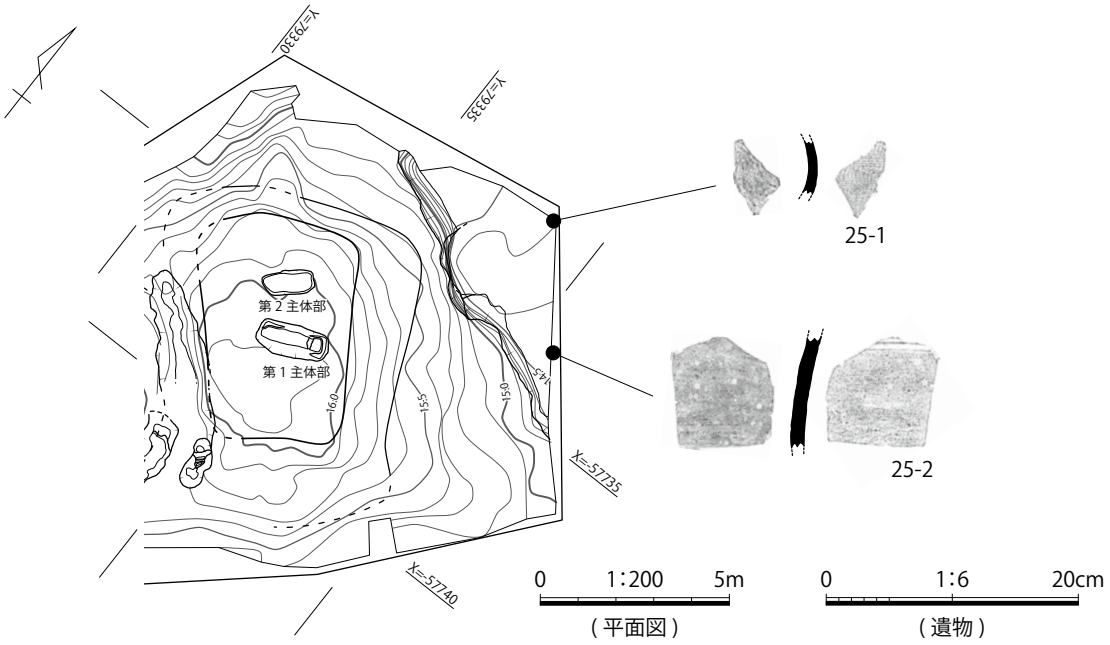
検出した墓壙は現状では掘り込みがかなり浅く、かろうじて残存した墳丘北西側の墳頂平坦面に墓壙の底部が検出できたものと考えられ、墓壙上部のほとんどが流出しているものと判断される。墓壙覆土内には第 1 主体部と同様に地山岩盤ブロックが混入しており、盛土と岩脈を掘り抜いた墓壙の掘削土をそのまま埋め戻したものと考えられる。墓壙内や墓壙上面から遺物の出土はなかった。



第 23 図　3 号墳第 2 主体部実測図

第 3 項　遺物出土状況（第 24 図）

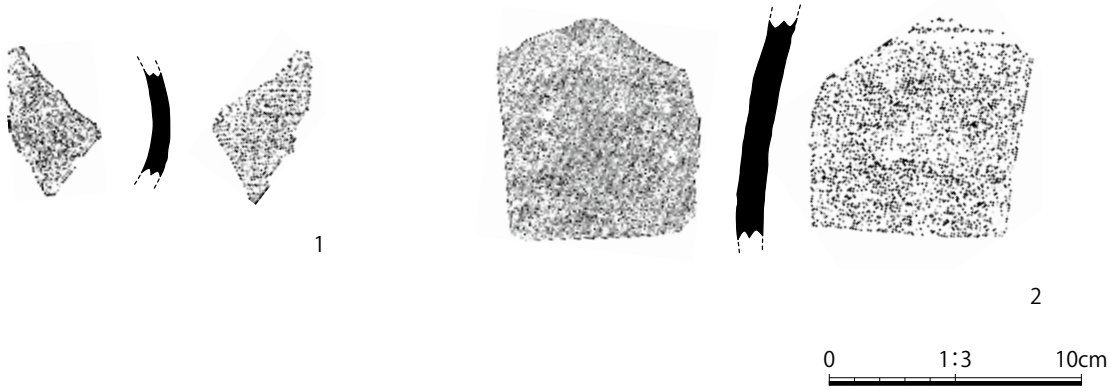
ここでは、3 号墳周辺の遺物出土状況を図示する。遺物は、3 号墳から北東側の斜面を下った平坦面に位置する調査区東端で須恵器片が 2 点（25-1・2）出土した。なお、図示した須恵器片の出土位置は、墳丘盛土の流出によって本来遺存していた位置から移動した後の位置を示している可能性があるが、古墳に伴う遺物と考えられることからここに含めている。



第 24 図　3 号墳周辺遺物出土状況平面図

第 4 項　出土遺物（第 25 図）

出土した須恵器はいずれも破片である。25-1 は壺甕類の一部と考えられるが、器形から焼き歪みの可能性がある。外面には平行のタタキ目が見られ、わずかに自然釉が付着する。内面の当て具痕は丁寧に消されている。接合はしないが、1 号墳周辺で出土した 11-1 と同一個体と思われるものである。25-2 は大甕の頸部片である。口縁端部は欠損しているが、口縁部付近に凹線による段がつけられている。外面には横方向に平行のカキ目、内面には回転ナデが施され、内外面ともに自然釉が付着する。大谷編年出雲 1 期の範疇のものと考えられる。



第 25 図　3 号墳周辺出土遺物

第 5 節　その他の遺構と遺物

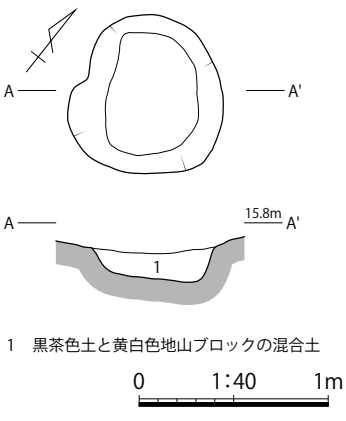
ここでは、墳丘間の区画溝と切り合う状態で検出した土坑 2 基（SK02・03）をその他の遺構として掲載し、表土掘削中に出土した遺物の中から図化できたものを遺構外出土遺物として取り扱う。

なお、調査区北東端で検出した土坑 1 基（SK04）は、平坦面まで掘り下げた段階でプランを検出したために土坑の大半は掘りすぎてしまったが、残存していた壁面の土層堆積に乱れが見られることや出土遺物もないことから、風倒木の痕跡と考えられた。

第 1 項　土坑

SK02（第 26 図）　SK02 は、1 ～ 2 号墳の区画溝内の南側で検出した土坑である。区画溝との前後関係は、遺構の切り合いから区画溝（古）－ SK02（新）と考えられる。

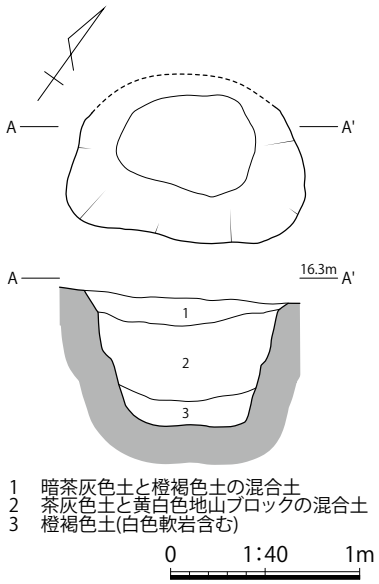
土坑の平面形は歪んだ円形を呈し、平坦な底面をもつ。検出面は標高 15.67 mで、規模は上縁長軸 0.84 m、短軸 0.68 m、深さ 0.14 mを測る。埋土は黒茶色土と黄白色地山ブロックの混合土（第 1 層）の単層が堆積する。埋土の状況から人為的に埋め戻されているものと捉えられるが、出土遺物もなく、明確な遺構の時期や性格は不明である。



第 26 図　SK02 平面図・断面図

SK03（第 27 図）　SK03 は、2 ～ 3 号墳の区画溝内の中央部で検出した土坑である。検出面は標高 16.22 mと 2 号墳の墳頂よりもやや高い位置で、表土直下に堆積する淡茶褐色土上面から掘り込まれている状況を確認した。区画溝との前後関係は、遺構の切り合いから区画溝（古）－ SK03（新）と考えられる。

土坑の平面形は楕円形を呈し、平坦な底面をもつ。規模は上縁長軸 1.22 m、短軸 0.87 m、深さ 0.68 mを測る。埋土は暗茶灰色土と橙褐色土の混合土（第 1 層）、茶灰色土と黄白色地山ブロックの混合土（第 2 層）、橙褐色土（第 3 層）が堆積する。埋土の状況から人為的に埋め戻されているものと捉えられるが、出土遺物もなく、明確な遺構の時期や性格は不明である。

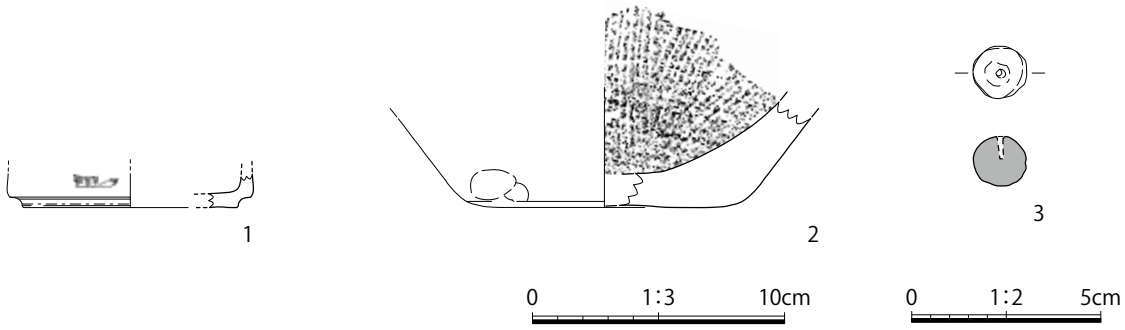


第 27 図　SK03 平面図・断面図

第 2 項　遺構外出土遺物（第 28 図）

ここで掲載する遺物は、表土掘削中に出土した遺物を取り扱う。28-1 は肥前系磁器の蓋付鉢である。底部のみ残存するが、筒形で外面に染付を施す。28-2 は肥前系陶器の擂鉢である。平底で、底部外面に糸切り痕をもつ。これらの陶磁器は 17 世紀後半～ 18 世紀代のものである。

28-3 は鉛製の鉄砲玉である。直径 1.4㎝、重さ 13.4g を測り、中央に直径 1.5㎜の孔をもつ。明治 22 年に作成された黒田村切図を見ると、調査地から東に近接する丘陵上には「陣山」の字名が記載されていることから、出土した鉄砲玉は中世の山城に関連した遺物の可能性が考えられる[(2)]。



第 28 図　遺構外出土遺物

第 3 項　T4 トレンチの調査成果（第 29 図）

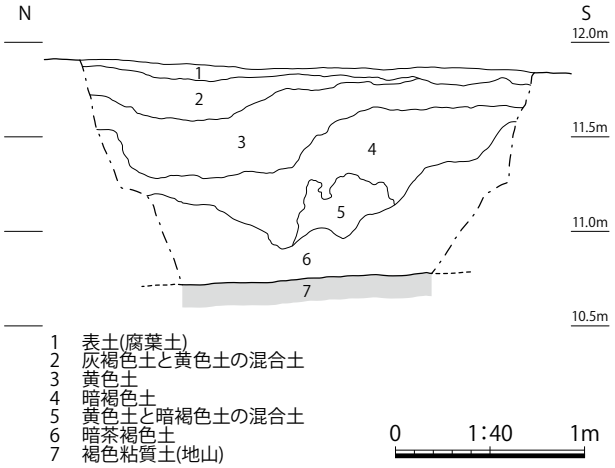
白岸古墳群が所在する丘陵の尾根北西斜面では横穴墓の存在の可能性が考えられたため、斜面の下方に 1 箇所のトレンチ（T4）を設定して、横穴墓の有無について確認調査を実施した（T4 トレンチの位置は第 7 図に掲載）。

T4 トレンチは、尾根斜面の下にある平坦地に長さ 2.50 m×幅 0.50 mの規模で南北方向に設定した。調査の結果、表土から 1.10 m掘り下げた時点で地山面に到達した。表土以下から地山面までの間に遺構や遺構面は検出していない。遺物は、第 29 図に図示した東壁土層の暗褐色土（第 4 層）と暗茶

褐色土（第 6 層）から肥前系磁器や在地系陶器（布志名焼）の小片が出土した。これらの遺物以外に、古墳や横穴墓に関連する遺物の出土はなかった。

調査成果から、地山面から上層は近世以降に堆積した土層と考えられ、丘陵の尾根北西斜面に横穴墓は存在していないものと判断した。

写真 1　T4 トレンチ完掘状況



第 29 図　T4 トレンチ断面図

註

(1)　白岸古墳群で出土した須恵器の時期については、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　仁木聡氏にご教示を頂いた。また、実見された須恵器の甕片について「内面のタタキ目をスリ消すものは 5 世紀後半～末 (TK23・47 並行期) が主体で、6 世紀まではいかないであろう」との指摘を受けた。

(2)　調査地から南へ約 1㎞離れた場所に位置する宍道湖岸周辺には、南西方向に延びる低丘陵があり、中世の山城である荒隈城が存在していたとされる。城域の範囲は明確ではないが、現在の国屋町・黒田町あたりを中心に、西は浜佐田町、東は中原町・末次町あたりまで広がっていたと考えられている。調査地の東に近接する丘陵は、この荒隈城が立地していた丘陵から北へ向かう延長上にあたり、明治 22 年の切図に見られる「陣山」という字名の記載は中世の名残りの可能性があるものと考えられた。

参考文献

鹿島町教育委員会 2002 『奥才古墳群第 8 支群』県道御津東生馬線改良工事に伴う調査

島根県教育委員会 2010 『梨ノ木坂遺跡　庵寺古墳群　庵寺遺跡Ⅱ』一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3

島根県教育委員会 2014 『庵寺古墳群Ⅱ　大迫ツリ遺跡　小釜野遺跡』一般国道 9 号（仁摩温泉津道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5

島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『松江市東部における古墳の調査』島根県古代文化センター調査研究報告書 23

八雲村教育委員会 2002 『谷ノ奥遺跡』一般国道 432 号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

第 4 章　総括

白岸古墳群は、松江市黒田町字白岸に所在する丘陵の尾根上に築造された古墳である。調査の結果、見つかった古墳は 2 基の方墳と 1 基の円墳であることが判明し、出土遺物の様相から大谷編年出雲 1 期中段階の範疇にあたる古墳時代中期（5 世紀後半～末）に位置付けられるものと考えられた。本章では今回の調査成果に基づき、白岸古墳群の様相について若干の考察を加えてまとめてみたい。

第 1 節　白岸古墳群の様相

古墳群の構成（第 30 図・表 2）

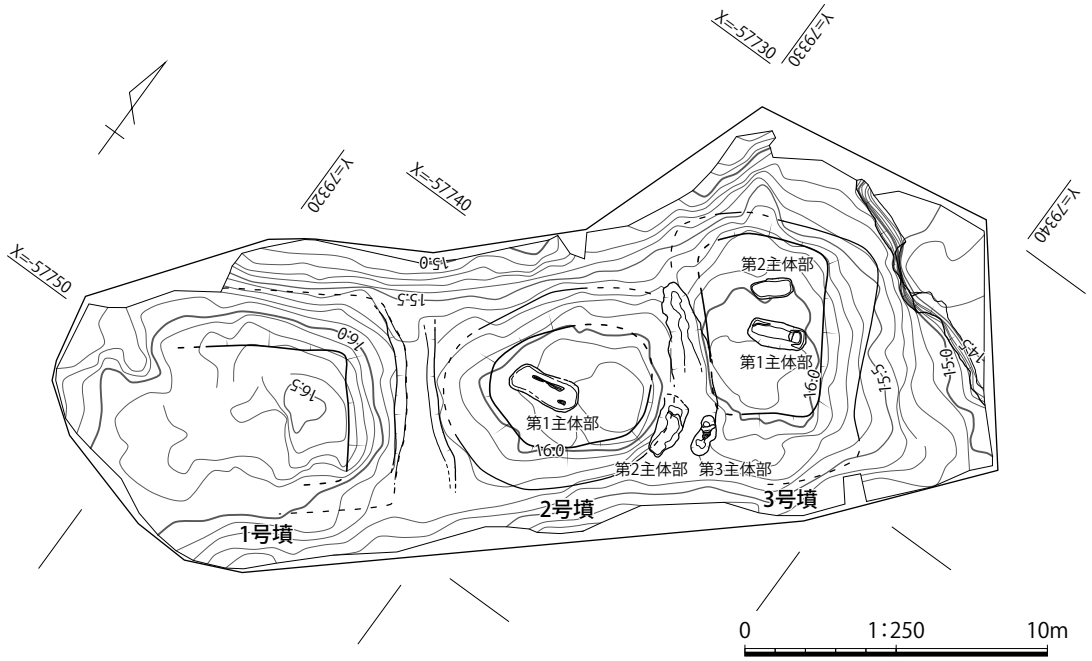
今回の調査で確認した 3 基の古墳は、南西から北東方向の丘陵の尾根上に 1 基ずつ縦列する形で並んでいる。いずれも墳丘の規模が 10 m以下、高さが 1 m未満の小規模な古墳である。

1 号墳は、尾根上の南西側に位置する 9.80 × 7.30 mの方墳である。墳頂標高は 16.62 mを測り、白岸古墳群中最高所に位置する。墳丘は高さ 0.80 mで削り出した地山の上に盛土を施して築造している。墳丘西側は近世の段階に削平されていたために墳頂平坦面は原形を留めておらず、主体部は消失しているものと考えられた。

2 号墳は、尾根上の中央に位置する直径 8.20m の円墳である。墳頂標高は 16.36 mを測り、墳丘は高さ 0.68 mで削り出した地山の上に盛土を施して築造している。主体部は墳頂中央からやや西側で第 1 主体部を検出しているが、平面プランは明瞭ではなく、掘り込みも浅いことから、明確に主体部と判断できる根拠は得られていない。また、墳丘東側の墳裾では墳裾主体部とした第 2・3 主体部を検出している。この 2 つの墓壙は、形態が似ること・軸方位が揃うこと・床面から想定される掘り込み面から、ほぼ同一の時期に掘り込まれた墓壙と考えられ、墳裾に造られることから副次的な被葬者のものと推定される。

3 号墳は、尾根上の北東側に位置する 8.80 × 6.20 mの方墳である。墳頂標高は 16.27 mを測り、墳丘は高さ 0.70 mで削り出した地山の上に薄く盛土を施して築造している。主体部は墳頂平坦面中央から中心主体となる第 1 主体部とその北西側から第 2 主体部を検出した。古墳の主たる被葬者は墳頂平坦面中央に占地する第 1 主体部であり、第 2 主体部は第 1 主体部に比べて規模が小さく、墳頂中央からやや離れた位置に造られることから副次的な被葬者のものと推定される。

主体部について触れておくが、1 号墳の主体部は近世の削平により消失し、2 号墳の主体部は明確なものではなかった。3 号墳では第 1 主体部と第 2 主体部が確認でき、いずれも素掘りの墓壙を検出している。3 号墳の第 1 主体部の配置に注目すると、方形の墳丘にやや斜交する点から斜交主体部を意識した配置の可能性が考えられるものであった。斜交主体部は、墳丘の対角線上に埋葬施設を配置するもので、主として一辺 10 m前後の小規模で正方形プランの小方墳に採用され、出雲東部（意宇郡・島根郡）に濃密に分布しているとされている[(3)]（池淵 2007）。ただし、この埋葬配置がほぼ例外なく単数埋葬に限定される点から考えると、3 号墳は墳頂平坦面に 2 基の主体部が存在していることから、墳頂部における埋葬数の限定化への強い規制はこの古墳からは見出せていない。



第 30 図　白岸古墳群配置図 (S=1：250)

表 2　白岸古墳群遺構一覧

名称	墳丘			埋葬施設				出土遺物	備考
	墳形	規模 (m)	墳頂標高 (m)	主体部	構造	規模 (m)	主軸		
1 号墳	方墳	9.80 × 7.30	16.62	消失か	—	—	—	—	墳丘西側は近世に削平されている
2 号墳	円墳	径 8.20	16.36	第 1 主体部	墓壙	2.35 × 0.92 × 0.13	E − 12° − N	—	主体部は尾根方向と斜交する
				第 2 主体部	墓壙	2.02 × 0.82 × 0.31	N − 12° − W	—	墳裾主体部
				第 3 主体部	墓壙	1.36 × 0.60 × 0.14	N − 12° − W	—	墳裾主体部
3 号墳	方墳	8.80 × 6.20	16.27	第 1 主体部	墓壙	1.95 × 0.86 × 0.25	E − 22° − N	—	主体部は墳丘にやや斜交する
				第 2 主体部	墓壙	1.34 × 0.64 × 0.08	E − 42° − N	須恵器	主体部は尾根方向に合わせている

古墳の前後関係と被葬者

白岸古墳群は、出土遺物や埋葬施設の様相からは古墳の前後関係を明らかにすることはできなかったが、墳丘の配置や区画溝が先行する古墳の墳端を切ることなどから、築造の順序は 1 号墳→ 3 号墳→ 2 号墳と考えられた。

1 号墳は、古墳群中最高所にあり、2・3 号墳に比べて規模が大きいことから、当地での造墓活動を契機とする始点的な古墳と考えられる。3 号墳は、2 号墳に伴う区画溝に西側墳端が切られていることから、2 号墳よりも先行して築造された古墳といえる。2 号墳は、古墳と区画溝の切り合いから 3 号墳の後に築造された古墳と考えられ、古墳の築造後には墳裾に墓壙が掘り込まれている。

白岸古墳群に見られるような小型古墳は、初期群集墳に相当するものと考えられる。初期群集墳は、律令期の「郷・里」単位程度で複数形成されており、大豪族と中小豪族を支えていた地域の有力家長層がその被葬者として考えられている[(4)]（仁木 2015）。白岸古墳群では主体部内から副葬品は出土していないため推測に過ぎないが、家長クラスの被葬者が埋葬されていたものと想定しておきたい。

白岸古墳群の年代観

ここでは、今回の調査で出土した遺物の特徴をまとめ、白岸古墳群の年代観を検討してみたい。なお、古墳に伴うものと考えられる遺物には須恵器片が７点と金属製品が１点あり、そのうち埋葬施設から出土した遺物は３号墳の第１主体部から須恵器片が１点出土したのみである。そのため、時期比定の手がかりに乏しい状況にあるが、区画溝など墳丘の周辺から出土したものを墳丘からの流出品として捉えている。今回の調査で出土した古墳に伴う遺物はすべて須恵器で占められており、墳丘間の区画溝内の覆土上面から甕片が出土している点が注視される。出土した甕片は、外面に平行あるいは格子状のタタキ目、内面に青海波文のタタキ目を施すもので、内面の当て具痕をスリ消すという特徴が見られる。時期は、大谷編年出雲１期中段階（TK23･47 並行期）の範疇にあたる古墳時代中期（5 世紀後半～末）と考えられ、白岸古墳群の年代もこの時期に比定できる。

松江市域でこのような特徴をもつ須恵器の壺甕類が出土している古墳の類例は、塚山古墳・薬師山古墳・長砂古墳群などが挙げられる。松江市上乃木に所在する長砂古墳群は、古墳時代中期（5 世紀後半）の 16 基の古墳からなる群集墳で、土師器の大多数は周濠と墳裾から出土しており、長砂４号墳では故意に須恵器の甕を破砕して墳丘斜面から墳裾にかけて甕片をばら撒いた可能性が考えられている[(5)]。白岸古墳群の区画溝内から出土した須恵器の量は少ないが、周濠内から須恵器が小片となった状態で出土しているという点では長砂古墳群と共通するものと捉えられる。

また、白岸古墳群から北側へ約 2.5㎞離れた松江市東生馬町に所在する敷居谷古墳群は、古墳時代中期（5 世紀後半～末）の５基の小型古墳からなる古墳群で、敷居谷５号墳では周濠から大谷編年出雲１期の範疇に含まれる須恵器の蓋坏が出土している[(6)]。敷居谷古墳群は削り出した地山の上に盛土を施して墳丘が築造されており、主体部は素掘りの墓壙で副葬品が少ないことなど、古墳群の構成および築造時期について白岸古墳群との類似点が窺える遺跡である。

第２節　結語

以上のように、白岸古墳群の様相を簡潔に論じてみた。白岸古墳群は、古墳時代中期（5 世紀後半～末）に築造された古墳で、削り出した地山の上に盛土を施して墳丘を築造し、規模が 10 m以下の小規模な群集墳として位置付けを行った。

白岸古墳群が所在する松江市黒田町では、顕著な古墳の存在は知られていないが、黒田町から北側の比津町にある丘陵の先端には５世紀末～６世紀前半の比津小丸山古墳が所在し、さらに北側の法吉町にある谷平野の丘陵上には５～６世紀にかけて田中谷古墳・塚山古墳・新宮古墳など首長墳と考えられる古墳が累代的に築かれている。比津丘陵から南へ延びる支脈丘陵には、宍道湖へ向かって立地を換えたり統合がなされた古墳時代の集落群や、盟主墳あるいは有力家長クラスの被葬者が埋葬された古墳や古墳群が、ある程度の小地域性をもったまとまりで存在している可能性が推定される。

今回の調査では、古墳の検出例が無かった当地において貴重な成果が得られた。そして、白岸古墳群の発見によって古墳時代中期の古墳群に新たに一例を加えることができたものと考える。今後の調査事例の積み重ねにより、当地の古墳時代の様相がより具体的に解明されることを期待したい。

註

(3) 池淵俊一 2007「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センターから引用。

(4) 仁木聡 2015「出雲の豪族とその序列」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センターから引用。

(5) 松江市教育委員会 1983「長砂古墳群」『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』から引用。

(6) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1994『敷居谷古墳群発掘調査報告書 1』および松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1995『敷居谷古墳群発掘調査報告書 2』から引用。

参考文献

池淵俊一 2017 『古墳時代史にみる古代出雲成立の起源』松江市ふるさと文庫 18

大谷晃二 2006 「松江市比津小丸山古墳の測量調査報告」『島根考古学会誌第 23 集』島根考古学会

島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』

島根県古代文化センター 2015 『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集第 14 集

須恵器

遺物番号	出土位置	出土層位	種類	器種	法量（cm）			調整・手法の特徴・文様	色調	備考
					口径	底径	器高			
11-1	1~2 号墳間区画溝	溝埋土上面	須恵器	壺甕類か	—	—	(4.9)	内：ナデ 外：平行のタタキ目	内：灰色 外：灰色	外面にわずかに自然釉が付着。 焼き歪みの可能性あり。
11-2	1~2 号墳間区画溝	溝埋土上面	須恵器	甕	—	—	(2.8)	内：青海波文のタタキ目 外：平行のタタキ目	内：灰色 外：暗灰色	大谷編年出雲 1 期の範疇。 内面のタタキ目はスリ消し。 外面に自然釉が付着。
19-1	2~3 号墳間区画溝	溝埋土上面	須恵器	甕	—	—	(2.5)	内：青海波文のタタキ目 外：格子状のタタキ目	内：灰色 外：灰色	大谷編年出雲 1 期の範疇。 内面のタタキ目はスリ消し。
19-2	2~3 号墳間区画溝	溝埋土上面	須恵器	甕	—	—	(4.5)	内：青海波文のタタキ目 外：格子状のタタキ目	内：灰色 外：灰色	大谷編年出雲 1 期の範疇。 内面のタタキ目はスリ消し。
22-1	3 号墳第 1 主体部 SX04	墓壙上面	須恵器	甕	—	—	(5.0)	内：青海波文のタタキ目 外：格子状のタタキ目	内：淡灰色 外：淡灰色	大谷編年出雲 1 期の範疇。 内面のタタキ目はスリ消し。
25-1	3 号墳東側遺構外	橙褐色土	須恵器	壺甕類か	—	—	(4.3)	内：ナデ 外：平行のタタキ目	内：灰色 外：灰色	11-1と同一個体か。 外面にわずかに自然釉が付着。 焼き歪みの可能性あり。
25-2	3 号墳東側遺構外	橙褐色土	須恵器	甕	—	—	(8.7)	内：回転ナデ 外：横方向に平行のカキ目	内：暗灰色 外：暗灰色	大谷編年出雲 1 期の範疇。 口縁部付近に凹線がつく。 内外面に自然釉が付着。

陶磁器

遺物番号	出土位置	出土土層	種別	器種	器形	文様	装飾	法量（cm）			生産地	九陶編年	生産地年代	備考
								口径	底径	器高				
28-1	1号墳周辺	表土	磁器	蓋付鉢	筒形	—	染付	—	(8.4)	(1.3)	肥前	Ⅳ	1700 年代か	鉢の底部のみ残存。
28-2	3号墳周辺	表土	陶器	擂鉢	平底	—	—	—	(8.8)	(4.2)	肥前	Ⅲ	1650 ～ 1690	スリ目単位 8 本。 底部糸切り。

金属製品

遺物番号	出土位置	出土層位	種類	法量（cm）			重量（g）	備考
				最大長（径）	最大幅	最大厚		
11-3	1 号墳周辺遺構外	平坦面	大刀か	6.3	3.1	1.0	43.26	大刀の茎部と考えられる金属片。関は片関で斜角関。 茎口側に方形の鏨がつく。
13-1	SK01	土坑埋土	角釘	2.4	1.0	0.5	1.02	頭巻部は平坦。先端部は折れ曲がる。
13-2	SK01	土坑埋土	角釘	3.1	1.2	0.6	2.86	頭巻部は平坦。先端部は欠損。
13-3	SK01	土坑埋土	角釘	4.5	0.9	0.5	2.24	頭巻部は平坦。
28-3	1 号墳周辺遺構外	表土	鉄砲玉	(1.4)	—	—	13.37	鉛の鉄砲玉。中心部に孔をもつ。

瓦

遺物番号	出土位置	出土土層	種類	形状	胎土	装飾	法量（cm）		備考
							大きさ（cm）	重量（g）	
13-4	SK01	土坑埋土	平瓦	—	灰色	—	長さ(18.5)/幅(15.5)/厚さ1.5	455.28	尻側に切り込みが入る。

写　真　図　版

※遺物実測図との対応は図中に示した。(例：図版 10　11-1 は第 11 図 1 を表す)

1　白岸古墳群調査地遠景(南から)

2　調査前全景(北東から)

図版2

1　白岸古墳群全景(東から)　写真奥から1号墳・2号墳・3号墳

2　白岸古墳群全景(北東から)

3　白岸古墳群全景(南西から)

1　1号墳全景(東から)

2　1~2号墳間の区画溝(南東から)

3　1号墳西側削平部分の近世遺構群(南から)

4　SK01完掘状況(南から)

図版4

1　2号墳全景(東から)

2　2~3号墳間の区画溝(南東から)

3　1~2号墳掘り下げ状況(北から)

4　2号墳第1主体部ベルト設定状況(西から)

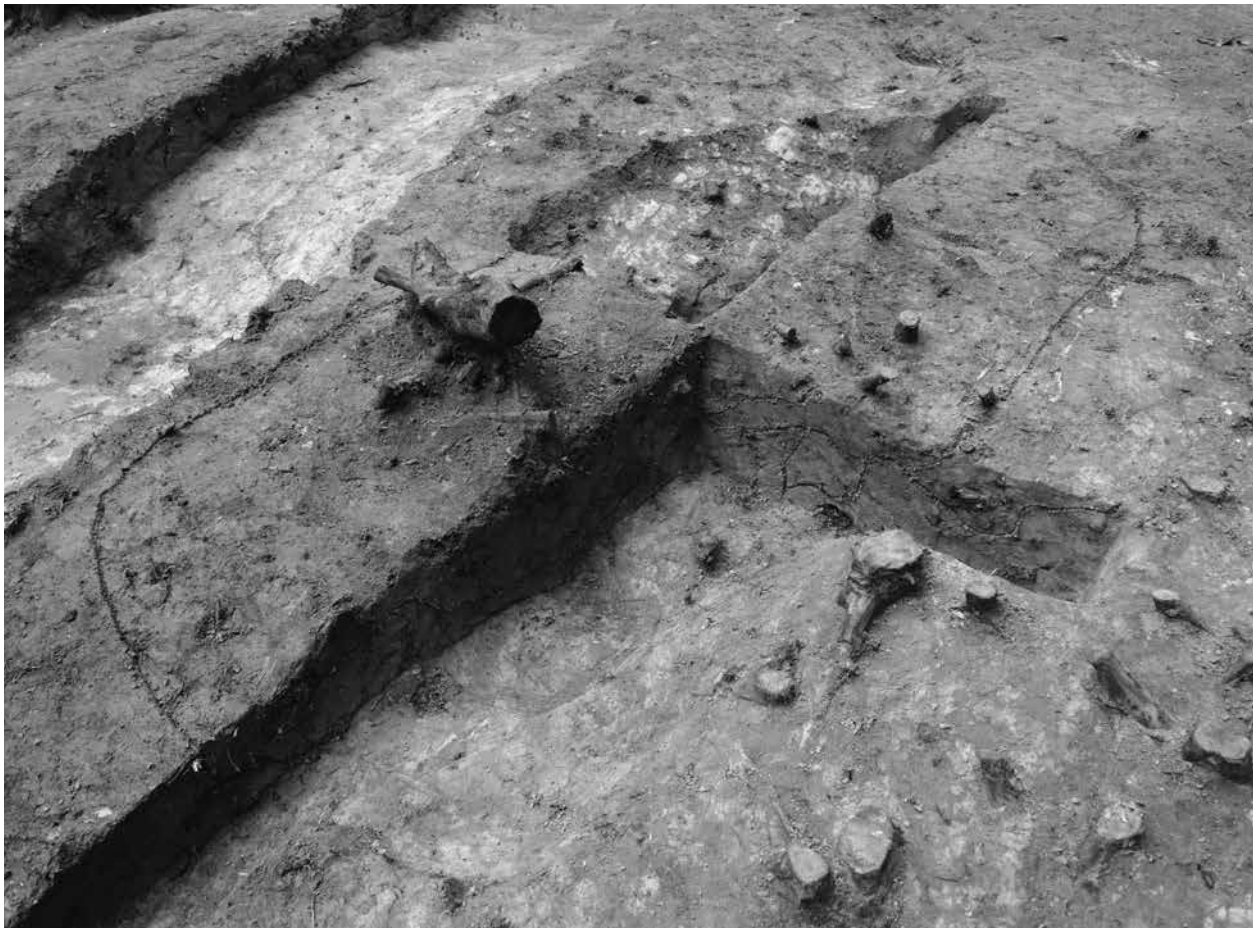
1　2号墳第1主体部完掘状況(南から)

2　2号墳墳裾主体部完掘状況(北から)　写真右が第2主体部・左が第3主体部

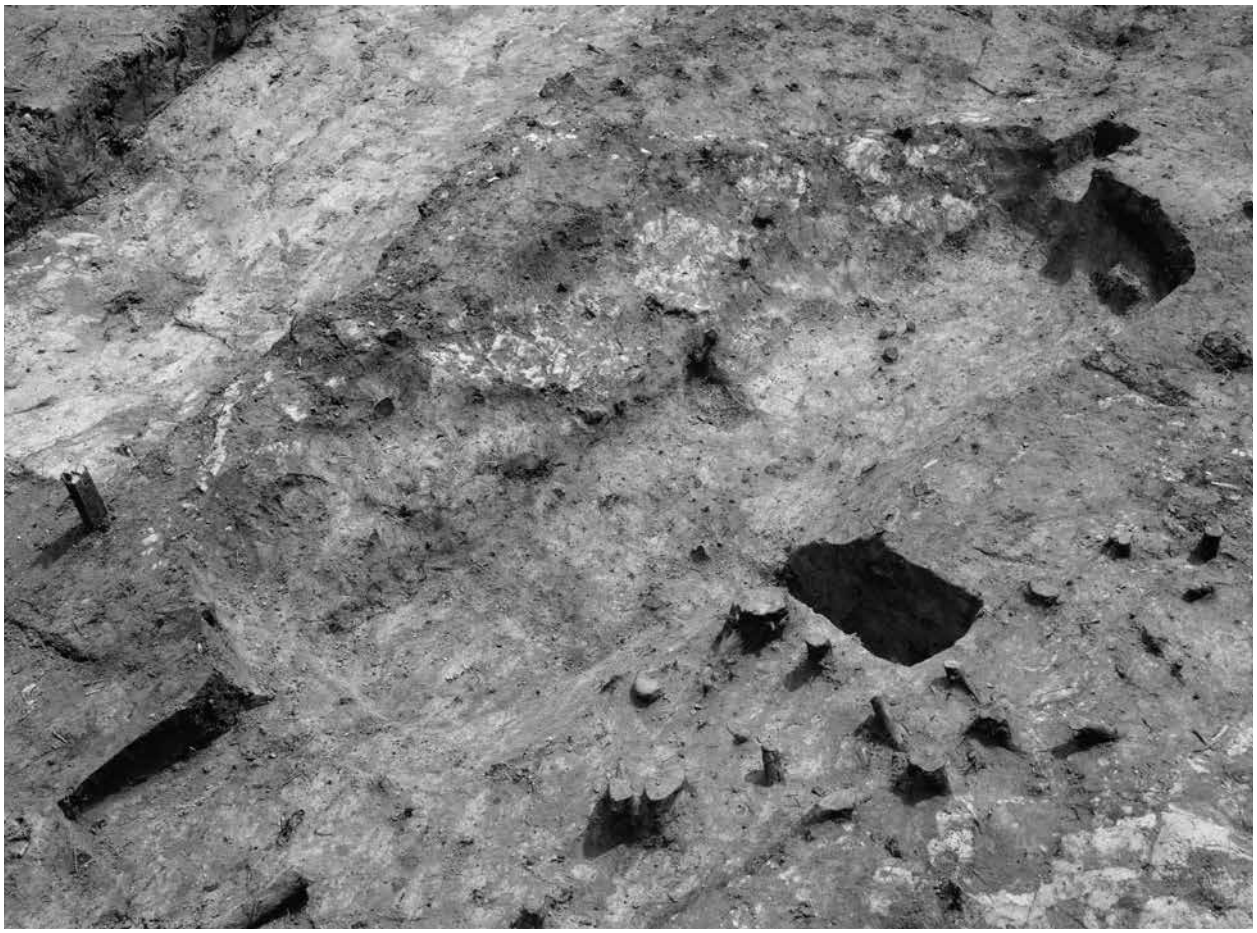
図版6

1　3号墳全景(東から)

2　3号墳第1・2主体部完掘状況(南から)

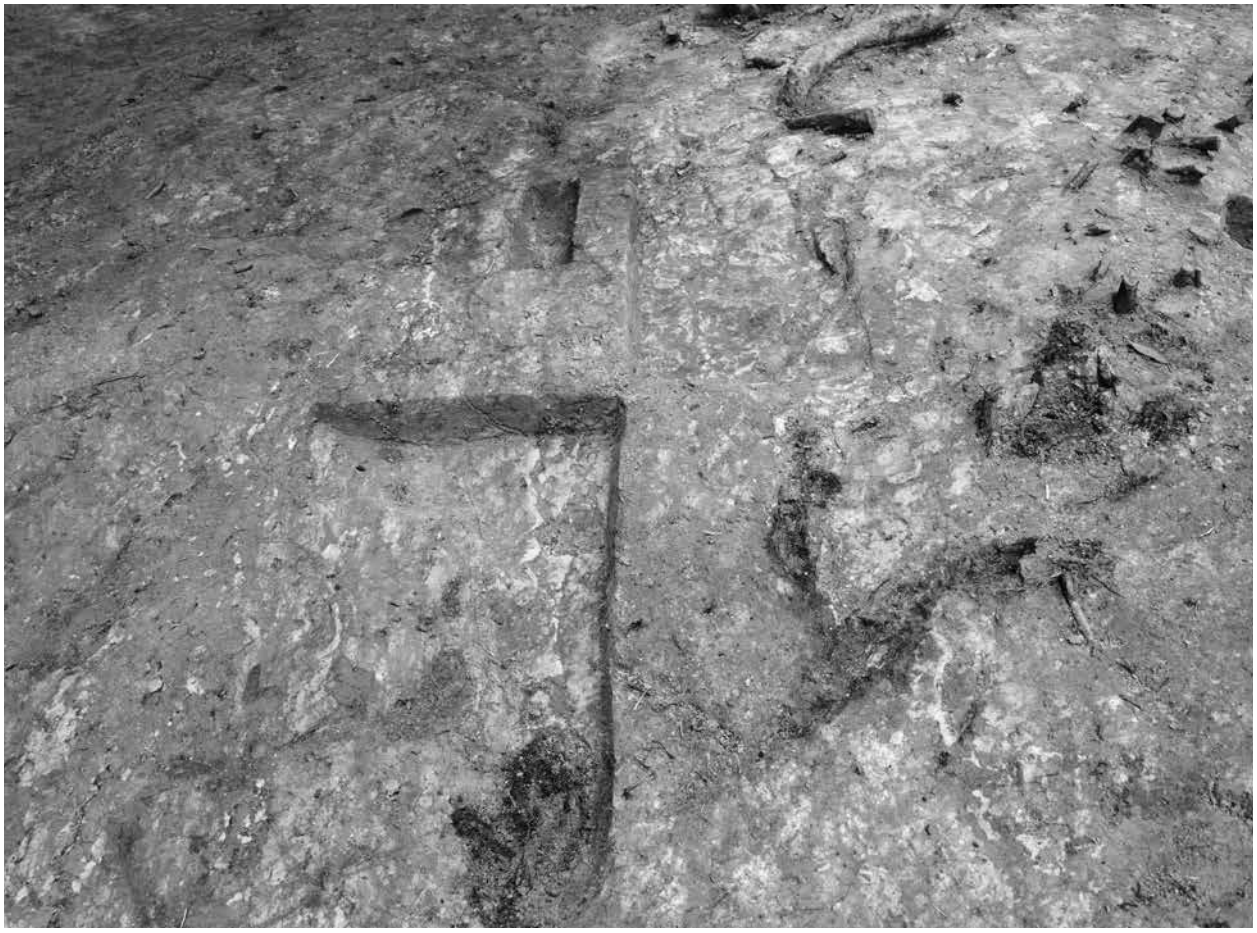


1　3号墳第1主体部土層堆積状況(北から)

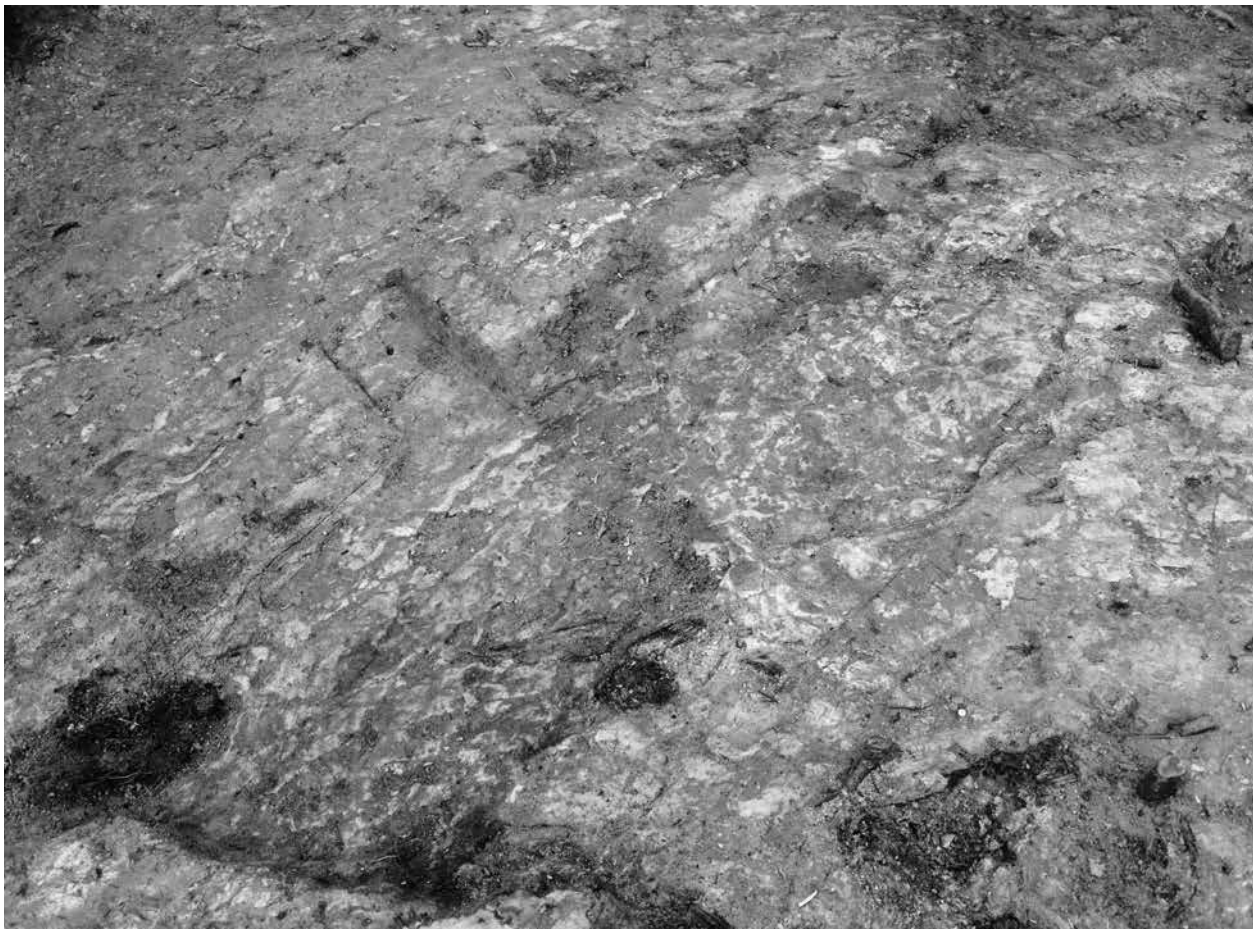


2　3号墳第1主体部完掘状況(北から)

図版8



1　3号墳第2主体部ベルト設定状況(西から)



2　3号墳第2主体部完掘状況(南から)

1　SK02埋土断面(南東から)

2　SK02完掘状況(南から)

3　SK03埋土断面(北西から)

4　SK03完掘状況(北から)

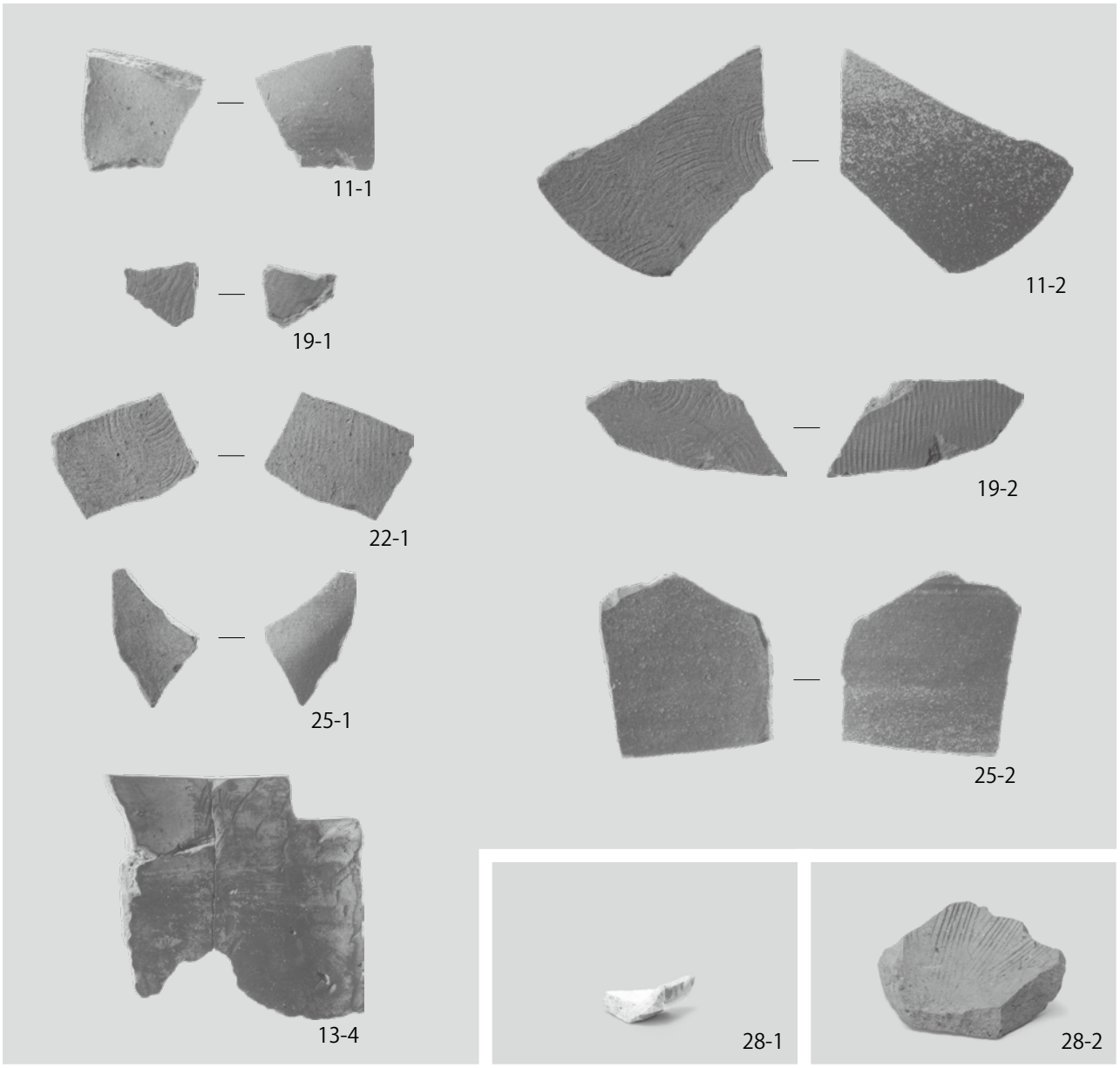
5　SK04検出状況(北から)

6　SK04完掘状況(北から)

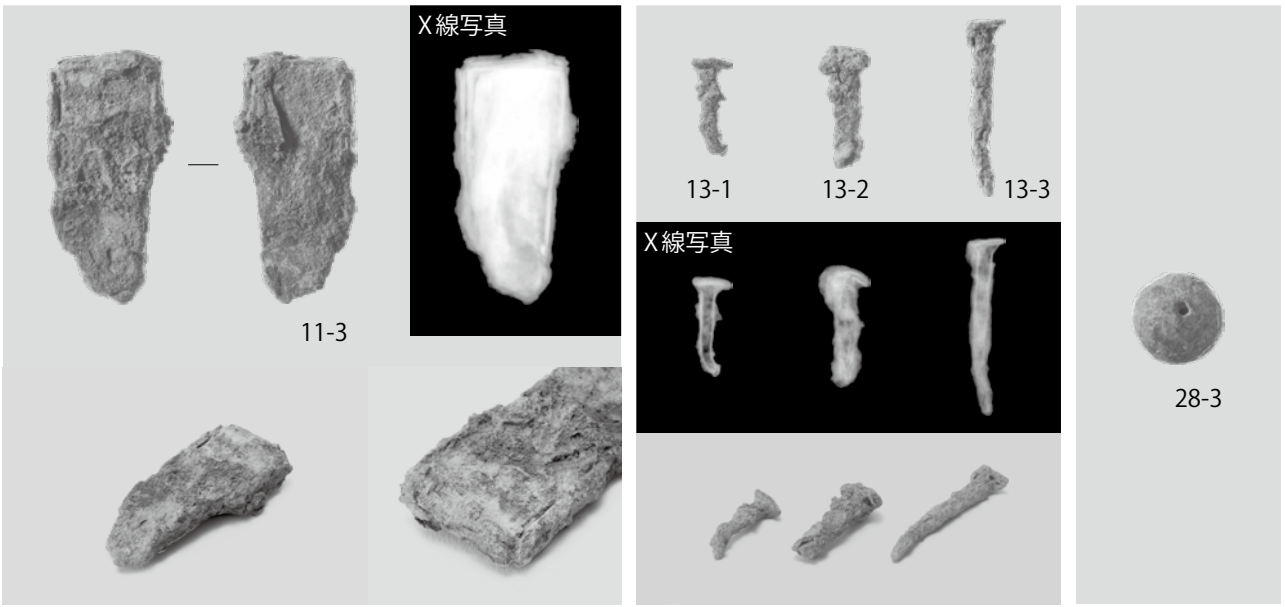
7　1~2号墳間の区画溝　遺物出土状況(第11図-2)

8　3号墳第1主体部　遺物出土状況(第22図-1)

図版10



須恵器・瓦・陶磁器



金属製品

報告書抄録

ふりがな	しろぎしこふんぐん
書名	白岸古墳群
副書名	アークタウン黒田造成工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第189集
編著者名	小山泰生
編集機関	松江市教育委員会 （松江市歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室） 〒690-8540　島根県松江市末次町86番地　　TEL：0852-55-5284
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 （埋蔵文化財課） 〒690-0401　島根県松江市島根町加賀1263-1　　TEL：0852-85-9210
発行年月日	2018年9月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
白岸古墳群（しろぎしこふんぐん）	島根県松江市（しまねけんまつえし）黒田町字白岸（くろだちょうあざしろぎし）599番地外（ばんちほか）	32201	D-1189	35° 28′ 34″ 133° 02′ 26″	20180412 ～ 20180620	200㎡	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白岸古墳群	古墳	古墳時代中期	古墳3基	須恵器 金属製品 近世陶磁器 瓦	古墳時代中期（5世紀後半～末）に位置付けられる古墳群。丘陵の尾根上に築造された3基の古墳で、1･3号墳は方墳、2号墳は円墳。2・3号墳で検出した主体部の埋葬形態は素掘りの墓壙である。古墳に伴う遺物として墳丘を画する区画溝から須恵器が出土した。

松江市文化財調査報告書　第 189 集

アークタウン黒田造成工事に伴う発掘調査報告書

白岸古墳群

平成 30(2018) 年 9 月

編集・発行　島 根 県 松 江 市 教 育 委 員 会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印　　刷　松栄印刷有限会社
島根県松江市西川津町 667-1